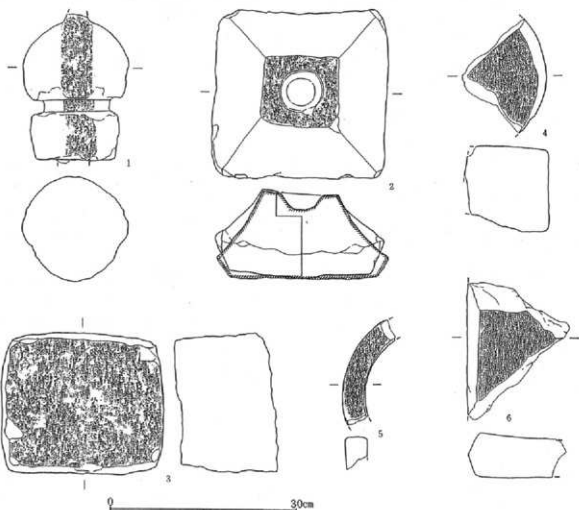


前橋城北曲輪遺跡

前橋地家裁所長宿舎敷地
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

東京高等裁判所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



前橋城北曲輪遺跡 3号溝出土遺物(記載漏れ)

番号	種別	材質	特徴	備
1	石製品	玉輪埴	赤黒輪、空室部・黒柄部欠損	現高23.4cm、重0.9kg、損砕安山岩
2	石製品	玉輪埴	火輪	上面12.1×11.1cm 下面27.2×25.8cm 高14.3cm 柄穴6.9×6.6-徑2.5cm、重10.3kg、角閃石安山岩
3	石製品	玉輪埴	石輪	24.7×20.0×16.2cm、重15.5kg、損砕安山岩
4	石製品	白	下白、予り首段縁埋	13.5cm、長さ2.8cm、損砕安山岩
5	石製品	白	上白上面縁部	幅3.6cm、損砕安山岩
6	石製品	不明	縁部薄段り加工、上・下両平滑	幅6.8cm、安山岩

正誤表

31頁注(1)

校正終了後、沼田城(沼田市教育委員会『沼田城跡』2001)において非饅糠成形、「ミナと藤左衛門」銘の焼塀壺が1点出土していることを確認した。

前橋城北曲輪遺跡

前橋地家裁所長宿舎敷地
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

東京高等裁判所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県庁を中心として、公共機関の建物が多くある前橋市大手町一帯の区域は、江戸時代の前橋城の城郭内でありました。描かれた絵図面や、今も残る土塁、石垣などで、当時の建物や門の配置とその規模を知ることができます。

このたび、当事業団では前橋地方裁判所、同家庭裁判所の所長宿舎建て替え工事にともなって、前橋城北曲輪遺跡の発掘調査を行いました。その結果、庭に池をもつ江戸時代後期中級武士の屋敷の様子が明らかとなりました。発見された陶磁器の中には遠く九州の肥前国で作られたものが含まれており、当時の広範囲な物品の流通の状況を示しています。

さらに、市街化著しい当地区で今では地上で見ることの少ない6世紀代の古墳も今回の調査で判明しました。

発掘調査から報告書刊行にいたるまで、東京高等裁判所、群馬県教育委員会及び地元関係機関の皆様から各種のご指導、ご協力をたまわりました。衷心から感謝申し上げますとともに、本報告書が地域の歴史を解明するための資料として末永く活用されることを願ひまして序といたします。

平成14年3月26日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野宇三郎

例 言

- 1 本書は、前橋地家裁所長宿舍新営工事事業に伴い発掘調査された前橋城北曲輪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は、群馬県前橋市大手町三丁目8番地2に所在する。
- 3 遺跡の発掘調査及び整理事業については東京高等裁判所から委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 発掘調査呼び整理調査期間
 - (1) 発掘調査 平成13年8月20日～9月30日
 - (2) 整理調査 平成14年1月1日～3月31日
- 5 発掘調査及び整理事業体制
 - (1) 事務担当者
小野宇三郎、赤山容造、吉田 豊、住谷 進、水田 稔、能登 健、大島信夫、小山友孝、西田健彦、
國定 均、小山建夫、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、森下弘美、片岡徳雄、田中賢一、
吉田恵子、並木綾子、今井もと子、佐藤美佐子、内山佳子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、
若田 誠、松下次男、吉田茂、藤原正義
 - (2) 発掘調査担当者 高井佳弘、斎藤利子
 - (3) 整理担当者 松原孝志
整理補助 鈴木幹子、山崎由紀枝、木暮芳枝、本多琴恵、白井和子、根井美智子
- 6 本書作成担当
編 集 松原孝志
執 筆 小山友孝、高井佳弘、石守 晃、大西雅広、深澤敦仁
上記以外 松原孝志
遺物観察表 大西雅広、深澤敦仁
遺構写真撮影 発掘調査担当者
遺物写真撮影 佐藤元彦
保存処理 関 邦一、土橋まり子、横倉知子、藤井文江、小村浩一、高橋初美
機械実測 佐藤美代子、矢高三枝子、田中富子、富沢スミ子、田中精子、千代谷和子
- 7 発掘調査及び整理事業での委託関係は次の通りである
遺構図等測量・空中写真……技研測量設計株式会社、井戸掘削……有限会社群馬地水
埴輪・陶磁器トレース……有限会社前橋文化財研究所
- 8 出土遺物・図面・写真・記録等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管している。
- 9 発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめとして、遠方からも多数の方々に参加いただいた。調査に尽力して下さった作業員の方々に感謝の意を表す次第である。
- 10 発掘調査及び報告書作成にあたっては、下記の諸氏・諸機関に御教示・御協力等をいただいた。記して感謝の意を表す次第である（順不同・敬称略）。
原 真、関口和也、飯森康広、中央三井信託銀行前橋支店、群馬県教育委員会文化財保護課

凡 例

- 遺構の計測値については、遺構平面図の上端面を計測した。
- 遺構図の縮尺については、各々のスケールを参照していただきたい。
- 各断面図に表記された標高値の単位はメートルである。
- 埴輪の実測図は、復元したものについては1/5、破片は1/4で掲載した。
- 埴輪の写真は、復元したものについては1/6、破片は1/5で掲載した。
- 陶磁器・石製品の実測図は、原則1/3で掲載した。これ以外の縮尺を用いる場合には各遺物実測図に明記したので参照していただきたい。
- 陶磁器・石製品の遺物写真は、原則実測図と同倍尺とした。これ以外の縮尺を用いる場合には各遺物実測図に明記したので参照していただきたい。
- 出土遺物に付した番号は埴輪と陶磁器類・石等とも各々通番とした。
また、これらの番号は図・写真とも同一のものとした。
- 掲載した測量図の座標は2002年4月改正以前の日本測地系を使用している。
なお、本遺跡においては、X座標は43キロメートル、Y座標は-68キロメートルの範囲内にあるため、両座標ともキロメートル単位は省略して表記した。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
写真図版目次	
抄録	
第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査及び整理の方法と経過	
1 発掘調査の方法と経過	2
2 整理調査の方法と経過	3
第2章 立地と環境	
第1節 遺跡の立地と自然環境	4
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	5
第3章 遺構と遺物	
第1節 遺跡の概要	7
第2節 遺構と遺物	
1 古墳時代	8
2 中近世	23
第4章 小考 ーまやばし城と前橋城北曲輪遺跡ー	52
写真図版	
付図 前橋城北曲輪遺跡全体図 (1/100)	

挿図目次

第1図	遺跡位置図(1/5,000).....	1
第2図	遺跡位置図(1/25,000).....	4
第3図	前橋城周辺遺跡分布図.....	7
第4図	遺跡概念図.....	8
第5図	1号墳平・断面図.....	9
第6図	1号墳出土遺物(1).....	10
第7図	1号墳出土遺物(2).....	11
第8図	1号墳出土遺物(3).....	12
第9図	1号墳出土遺物(4).....	13
第10図	1号墳出土遺物(5).....	14
第11図	1号墳出土遺物(6).....	15
第12図	1号墳出土遺物(7).....	16
第13図	1号墳出土遺物(8).....	17
第14図	中近世遺構(溝・建物跡・土坑・ピット)図.....	26・27
第15図	1・2・3・4号井戸.....	28
第16図	池.....	29
第17図	2・3号土坑・pit断面図.....	30
第18図	1号墳・1号溝出土遺物.....	32
第19図	1・2号溝出土遺物.....	33
第20図	2・3号溝出土遺物.....	34
第21図	3号溝出土遺物.....	35
第22図	3号溝・3号井戸出土遺物.....	36
第23図	4号井戸出土遺物.....	37
第24図	池出土遺物(1).....	38
第25図	池出土遺物(2).....	39
第26図	池出土遺物(3).....	40
第27図	池出土遺物(4)・遺構外出土遺物(1).....	41
第28図	遺構外出土遺物(2).....	42
第29図	遺構外出土遺物(3).....	43
第30図	遺構外出土遺物(4).....	44
第31図	酒井時代末期の前橋城縄張り図.....	53
第32図	再築前橋城縄張り図.....	54
第33図	上：正保元年の北郭武家屋敷の配置 下：明治3年の柳原御門内武家屋敷の配置.....	56

写真図版目次

- PL 1 調査区周辺遠景
- PL 2 調査区全景（西から）
- PL 3 調査区全景（北から）・1号墳
- PL 4 1、2、3号掘立柱建物・1号溝
- PL 5 2号溝・1、2号溝合流部石組
- PL 6 3A、3B号溝・溝土層堆積状況
- PL 7 1号墳埴輪出土状況・池護岸石組・掘立柱建物礎石・1、2、3、4号井戸
- PL 8 池全景・池護岸部
- PL 9 池護岸部
- PL10 1号墳出土遺物 埴輪（1）
- PL11 1号墳出土遺物 埴輪（2）
- PL12 1号墳出土遺物 埴輪（3）・古墳時代土器
- PL13 1号墳周堀内出土遺物
- PL14 1、2、3号溝出土遺物
- PL15 2、3、4号井戸・池出土遺物
- PL16 池出土遺物
- PL17 遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まえばしじょうきたぐるわいせき
書名	前橋城北曲輪遺跡
副書名	前橋地家裁所長宿舍敷地埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第299集
編集者名	松原孝志
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL0279(52)2511
発行年月日	西暦2002年3月26日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯東経		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
マエハシジョウキタクワセキ 前橋城北曲輪遺跡	マエハシジョウキタクワセキ 群馬県前橋市大手町8-2	10201	10005-03200	36° 23′ 27″	139° 03′ 58″	20010820～ 20010930	540	前橋地家裁所長宿舍建て替え工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
マエハシジョウキタクワセキ 前橋城北曲輪遺跡	城郭 古墳	古墳時代 中近世	古墳 1基 掘立柱建物 3軒 ピット 16基 土坑 3基 井戸 4基 溝 4条 池 1基	埴輪 陶磁器 土器類 石製品 金属製品	

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

前橋城北曲輪遺跡は近世の上野国前橋城内の一郭を占める。前橋城の城主は、慶長6年(1582)から寛延2年(1749)までの間は、譜代大名の酒井雅楽頭家であり、寛延2年から明治4年(1871)の廃藩までは松平大和守家であった。

利根川の左岸に立地する前橋城はたびかさなる河川浸食に悩まされていた。転封により姫路から城主となった松平家も、明和4年(1767)には居城を領地の武蔵国川越に移した。以後、陣屋支配となった前橋は次第に衰退していった。城を再建して城主の帰郷を願う町民達の熱き再築請願がかなえられたのは、明治維新直前の慶応3年(1867)のことであった。

廃城から140年余を経た現在、この地域は群馬県庁を中心に官公署等の建物が並んでいる。その中の前橋地方裁判所及び家庭裁判所の北には、両裁判所長の宿舎があり、これらの老朽化に伴う改築工事を平成13年度に行うことが決定されたことが、今回の発掘調査の契機である。

平成13年2月6日付けで前橋地方裁判所長から群馬県教育委員会に対し、当該地の埋蔵文化財に関する試掘調査の依頼が提出された。2月28日に、群馬県教育委員会文化財保護課が現地の状況を視察。その結果、所長宿舎の建設工事実施前に発掘調査が必要と判断された。その後、数回にわたり関係者による協議を行い、工事工程との調整から発掘調査を平成13年8月から9月の2ヶ月とし事業主体者の東京高等裁判所が発掘調査主体者となる財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団と委託契約を締結して実施することとなった。



第1図 遺跡位置図(1/5,000)

第2節 発掘調査及び整理の方法と経過

1 発掘調査の方法と経過

本遺跡は市街地に位置するため排土を調査地外に運び出すことができず、調査地の周囲に置かなければならなかったが、当初の調査対象面積は約540㎡と狭かったので全域を一度に調査することができた。表土除去は重機を用いて行い、排土は調査地の周囲に置いた。その後追加された調査対象地については、排土置き場がそれ以上確保できないために、すでに調査が終了していた部分を先行して埋め戻し、そこを排土置き場として表土除去を行うこととした。対象地は住宅として利用されていたので攪乱が多く、表土は50～80cmと厚かった。遺構確認は総社砂層上面と思われるが、一部FA泥流層と思われる土層も残っていた。

表土除去後、遺構確認を行い、それぞれの遺構の調査を行った。溝や池・古墳などの大きな遺構については土層観察のためのベルトを適宜残し、ピットなどの小さな遺構については半載して掘り下げた。いずれも土層の断面実測を行ったのち完掘し、写真撮影・平面実測を行った。井戸については遺構が深く危険なため、業者に委託して調査を行った。その他、遺構の性質により、適宜最速の方法をとった。

写真撮影は35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルムを用い、適宜ブローニーサイズのモノクロフィルムも撮影した。また、調査途中で調査区全体の撮影を行うため、気球による空中写真撮影も行った。

遺構の平面測量は、国土地院系を用いて10mの方眼杭を打ち、それを基準として平板測量を行った。本遺跡固有のグリッド名称は特に設定していない。古墳と追加調査部分の平面測量については業者に委託した。

調査の経過の概略

- 平成13年8月20日 重機による表土除去開始。機材搬入。
- 8月21日 表土除去終了。台風による降雨のため作業員は休み。
- 8月23日 作業員初日。開始準備の後、現場の排水作業。東半部の遺構精査開始。
- 8月24日 東半部遺構精査作業継続。調査区南東隅の遺構が古墳であることが判明。遺構掘り下げ開始。
- 8月29日 前日の雷雨のため、現場水没。排水作業。東半部遺構調査継続。
- 8月30日 東半部遺構調査継続。3号溝トレンチ調査。
- 8月31日 東半部遺構調査継続。西半部遺構精査開始。
- 9月4日 雷雨のため現場水没。排水作業。東半部各遺構全景写真撮影。
- 9月6日 南西隅の遺構掘り下げ開始（池跡と判明したのは翌7日＝1号池）
- 9月11日 東京高裁にて工程会議。台風のため作業は休止。排水作業のみ行う。
- 9月12日 排水作業。池調査。
- 9月13日 調査区全景空中写真撮影。3号溝掘り下げ。
- 9月17日 3号溝石組み部分の写真測量。拡張部分に置いた排土の移動作業。井戸調査開始。
- 9月19日 3号溝全景写真。拡張部表土除去。終了後遺構確認。
- 9月20日 拡張部遺構調査。
- 9月21日 1号墳調査開始。
- 9月26日 拡張部全景・各遺構写真撮影。井戸調査終了。
- 9月27日 井戸埋め戻し。全遺構測量終了。
- 9月28日 機材搬出。安全確認。現地における調査終了。

2 整理の方法と経過

1月1日より整理調査・報告書作成を行うこととなった。年始休みを含んだため実際の作業は1月4日より行われた。発掘調査によって得られた遺物はコンテナバット(64cm×42cm×17cm)で10箱ほどであった。整理調査及び報告書作成は担当の他、整理補助6名という体制であった。

12月下旬 事前準備として、遺物の数量や洗浄・注記状況の確認を行った。同様に遺構図・写真などの数量や整理状況の確認をおこなった。

1月上旬 遺物の接合・復元を中心に作業を行った。また、遺構図・写真を確認し台帳化を行った。

1月中旬 遺物の接合・復元が済んだものから、写真撮影、実測図の作成の順に作業を移行した。写真撮影への移行の際、数名は遺構図の修正図の作成作業に入った。

1月下旬 遺物の実測図作成を中心に作業を行った。埴輪や陶磁器など一部の遺物図のトレースは外部に委託した。

2月上旬 遺構のトレース図作成を中心に作業を行った。

2月中旬～下旬 図版・写真図版の版下作成を中心に作業を行った。

3月上旬～下旬 校正と収納作業を中心に作業を行った。収納は、写真・原図・遺物の順に行った。これらの、報告書作成に係わる諸作業と保管に係わる整理を行い3月31日、すべての作業を完結した。

尚、遺物の観察表と本文執筆、編集作業に関しては、2月下旬までに各作業と平行して行った。

整理工程表

区 分		月			備 考
		1 月	2 月	3 月	
土 器 整 理	事前準備	[1月1日～1月31日]			12月末に実施
	接合	[1月4日～1月15日]			
	復元	[1月16日～1月25日]			
	実測	[1月26日～2月5日]			
	トレース	[2月6日～2月15日]			
	版下作成	[2月16日～2月25日]			
	写真撮影	[2月26日～3月5日]			
	写真版下作成	[3月6日～3月15日]			
遺 構	原図整理	[2月16日～2月25日]			
	トレース	[2月26日～3月5日]			
	版下作成	[3月6日～3月15日]			
	写真版下作成	[3月16日～3月25日]			
原 稿	遺物観察表	[1月16日～1月25日]			
	本文執筆	[1月26日～2月5日]			
そ の 他				[3月16日～3月25日]	校正 遺物収納など

第2章 立地と環境

第1節 遺跡の位置と自然環境

本遺跡は前橋市街地の西部、前橋市大手町にある。

この地域は現在では利根川左岸の前橋台地上に立地するが、現在の利根川の流路は15世紀後半になって定まったものであり、それ以前はこの大手町のすぐ北側から現流路を離れ、前橋市街地北東部を通過して南東方面に流れていた。つまり、この大手町一帯は利根川現流路と旧流路とが分岐するところにあたり、利根川の流路が変化する以前は、現在の利根川対岸とは一続きの台地上にあったことになる。本遺跡に即していえば、近世前橋城の時に利根川流路変化後、古墳時代が流路変化前に当たり、歴史的・地理的環境がそれによって大きく異なるので注意が必要である。前橋台地は榛名山南東にのびた、利根川旧流路と井野川とに挟まれた台地で、本遺跡はその北端部に位置する。標高は約108.60mである。現在は利根川から500mほど離れ、比高は約15mである。

この付近の主な堆積層は、最下層に利根川によって運ばれた前橋砂礫層があり、その上に浅間山の山体崩壊に起源する前橋泥流堆積物（約2万年前）、さらに榛名山起源の総社砂層が堆積している。前橋泥流堆積物の層の厚さは、この付近では8～13mほどに達する。本遺跡の遺構確認面はほぼ総社砂層の上面であり、井戸や堀などの深い遺構は前橋泥流堆積物にまで達していた。



第2図 遺跡位置図(1/25,000)

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

本遺跡は前述のように更新世後期に形成された前橋台地に立地していることもあって、周辺地域に旧石器時代の遺物は確認されていない。

続く縄文時代の遺構・遺物は、本遺跡南西に近接する前橋城遺跡(2)等で前期以降のものが出土するようになってくるが、その数量は多くない。

弥生時代の遺構・遺物は河川や、旧河道跡の谷地周辺部に散見されるが、やはりその数量は多くない。

一方、古墳時代に入ると前橋台地に於ける遺跡の分布状況は充実し、大規模な水田耕作も行われるようになり、古墳の造営が盛んとなってくる。本遺跡周辺では耕作遺構としては元総社寺田遺跡(3)で牛池川沿いの低地部で6世紀初頭のHr-FAで埋没した水田址が確認されている。また、旧利根川(広瀬川)右岸部では前期から始まる古墳の分布が広い範囲で見られるが、本遺跡や、南方の龍海院真遺跡古墳(4)、利根川を挟んだ西には6世紀初頭の王山古墳(5)等の古墳が見られる。本遺跡北西の前橋市総社町には6世紀後半の総社二子山古墳、7世紀中葉の愛宕山古墳、同後半の宝塔山古墳(6)、同末葉の蛇穴山古墳(7)の大型古墳があって、後終末期古墳の中で突出した存在となっている。尚、後三者は国指定史跡となっている。また同時期の遺跡として、第3図から外れているが、後述する上野国府の北には高崎市の上碑に記された放光寺と比定される山王廟寺が在る。

古墳時代末葉から飛鳥時代にかけて充実した状況を見せた本遺跡西部地域は律令期に於いてもその突出した状況は引き継がれる。即ち上野国府が本遺跡西方の前橋市元総社町に造られ、その西には上野国分僧寺・尼寺が造寺され、その周辺の国分寺中間地域遺跡、鳥羽(とりば)遺跡では発掘調査によって大集落が展開していることが確認されている。上野国府は方8町と推定され、部分的に発掘調査も行われているが全容は未だつまびらかでない。また、その南には東山駅路の支路が東西に走行している。この道路は平安時代末期の遺構として発掘調査され、幅員6mの道路が確認されている。尚、本遺跡付近での東山駅路の通過地点はよく分っていないが、本遺跡周辺部で旧利根川を渡河したかと思われる。一方、前橋の旧称「厩橋」は群馬(くるま)駅に関係するとも云われている。その他、前橋城遺跡(2)で平安時代末期の水田等も確認されている。

中世の本遺跡付近は国衙領と呼ばれた地域の一部を形成している。特に室町時代に於いて本遺跡付近は国府跡に蒼海城(8)を築いて本拠としていた上野守護代惣社長尾氏の勢力下にあつたものと思慮されるが、16世紀に入ると箕輪の長野氏の勢力が伸張し、長野氏が現在の群馬県庁付近に厩橋城(2)を築いてその支配下に入ることとなる。また、越後長尾(上杉)景虎、或いは相州小田原の(後)北条氏康についた厩橋城の対岸には、武田信玄が付城として石倉城(9)を築いている。この頃利根川は既に変流を始めているが、水量は利根川と広瀬川(旧利根川)であまり変わりはないようである。武田信玄がはしがを掛けさせて厩橋城を攻めているので、利根川の崖も今程には高くなかったようである。

近世に入ると厩橋城(前橋城)は前橋藩の城として整備され、本遺跡付近は城内に入って、一時期を除いて柳原門内の武家屋敷として使われている。城の東には城下町が整備され、城下町の広瀬川左岸には一時期広瀬河岸も設置されて物流基地となっていた。城下町は東西に長い、それを包むように南北に侍屋敷が設置されていた。江戸からの道は前橋城付近では現在の国道50号線沿いに大手口方向に入り、城の北には利根郡に抜ける沼田道も設置されている。一方、利根川以西地域には江戸の初めには総社藩が設置されていた。藩主秋元氏は最初、蒼海城東の八日市場城(10)に入るが、北方の総社に移り勝山城(11)を築いて居城と

第2章 遺跡の立地と環境

し、城下を整備している。尚、秋元氏は天狗岩用水を開削し、これを感謝した農民が秋元氏転封後、宝塔山古墳近くの光厳寺に力田遺愛の碑を建てて顕彰している。

明治時代に入ると前橋城は廃城となり、本遺跡付近は北曲輪町の一部として、市街地となり現在に至っている。



第3図 前橋城周辺遺跡分布図(1/35,000相当)

第3章 遺構と遺物

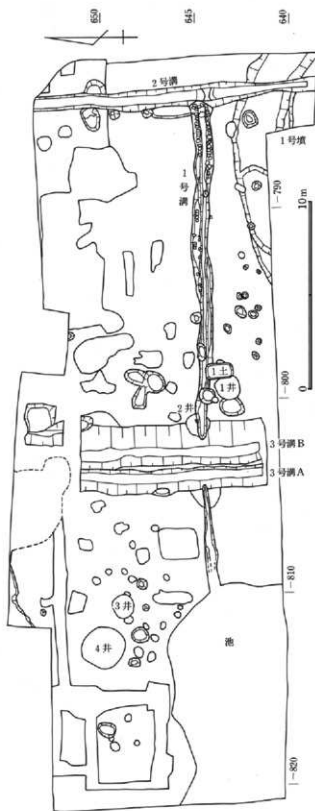
第1節 遺跡の概要

調査区は宅地として利用されていたため、建物基礎のほかに掘削が数多く入っていた。そのため、遺構の残存度はよくなかったが、溝3、池跡1、古墳1、井戸4、土坑2、建物跡3、ピットなどの比較的多様な遺構を調査することができ、古墳の埴輪や近世の陶磁器を初めとして多くの遺物が出土した。

これらの遺構は大きくふたつの時期に分けることができる。

ひとつは古墳時代のものである。調査区南東隅の古墳1基がこの時期のものであるが、残念ながら周囲の一部がかかっているのみなので、全体の形は不明である。

もうひとつは近世の前橋城に関わるもので、古墳以外の遺構はすべてこの時期のものである。前橋城にはいくつかの変遷があることが知られているが、これらの遺構のうち、中央に南北に走る3号溝（2時期ある）は出土遺物からは近世初期に遡ると思われ、近世前橋城の古い時期のものである可能性が高い。調査区南西部の池と、そこから伸びる東西溝の1号溝、東端近くの2号溝は、これも出土遺物から幕末に造られたいわゆる再建前橋城に伴うものと思われる。当時この場所は中級武士の屋敷となっており、池はその屋敷地の庭園に伴うものであり、1号溝はその排水ないし給水のための溝で、2号溝は屋敷地外側の道路備溝ではないかと思われる。ただし、池はその後も使用され続け、最終的に埋まったのは近代になってからである。その他の遺構は出土遺物が少なく、時期の特定は難しいが、3棟の建物うちの2棟（1号・2号）はその方向から再建前橋城以前のものである可能性が強い。また、2号井戸は切り合い関係から3号溝より新しく、1号溝よりも古いことが確認できる。再建前橋城以前のこの地がどのように使用されていたかの資料は乏しいので、これらの遺構は貴重な手がかりになるものと思われる。



第4図 遺跡概念図

第2節 遺構と遺物

1 古墳時代

1号墳

本古墳は調査区の南東隅にて、周堀の一部が確認された。以下、調査所見を記す。

検出面 古墳址の存在は、現地表面より0.5～1.0mにおいて周堀を検出することによって確認された。

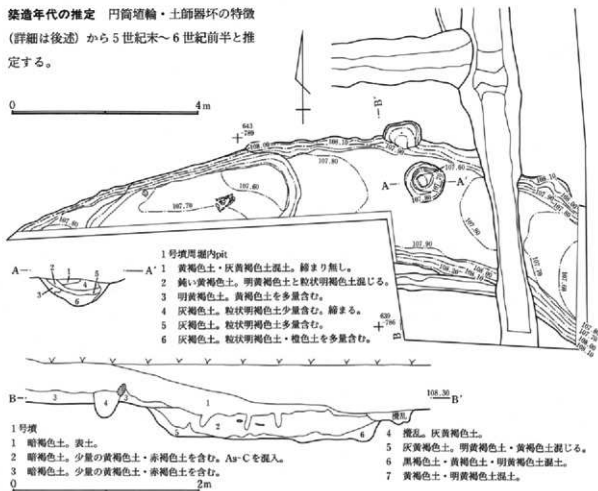
周堀 周堀は墳丘北側と考えられる箇所が一部が確認された。覆土は暗褐色土が主体であり、FA等のテフラ純堆積はなかった。検出面からの掘り込みの深さは0.7mである。断面形状は上幅3.2m、下幅2.0mの断面逆台形である。周堀底部の平坦面では直径0.6m、深さ0.4mの土坑1基が確認された。この土坑内には遺物はないが、覆土の状況から周堀の掘削・埋没時期とほぼ同時期とみてよい。

墳丘 墳形は周堀の形状から円墳の可能性が考えられる。規模は墳裾直径で20～30m程度と考えておきたい。但し、墳形・規模とも推測の域であり、今後の隣接地区の調査等で修正を迫られる可能性もある。盛土は未確認である。後世の削平により、失われたと考えられる。

埋葬施設 未検出である。そもそも、墳丘相当部分はほとんどが調査区外の南側に存在しており、残存の状況は全く不明である。墳丘同様、後世の削平により失われた可能性も考えられる。

遺物出土状況 遺物は周堀覆土中層から埴輪片と土師器片が出土した。埴輪は、墳丘からの転落と考えられる。遺物のほとんどは、覆土中層出土であり、樹立時期から時間差をもって転落したものと考えられる。

築造年代の推定 円筒埴輪・土師器坏の特徴(詳細は後述)から5世紀末～6世紀前半と推定する。



第5図 1号墳平・断面図

埴輪 出土埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪がある(第6図～第13図)。

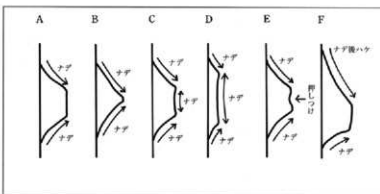
円筒埴輪

全体の形態 形態認識できる資料は全て、「2条3段」構成の円筒埴輪である。いずれも直線的に開き、口縁部で外反する。

成整形 外面は一次タテハケのみである。内面は、①ナデ後に上半のみにハケを施すものと、②ナデ後に全面にハケを施すものの2種類がある。破片資料が大半のため、①②の比率は正確には示せないが、傾向としては①の方が多いと思われる。底部調整が施された資料は一点も確認できない。赤彩は多くの資料で確認できた。なお、現状で確認不可能な資料についても、胎土や技法が赤彩資料と共通することから、かつては赤彩が施されていたと思われる。

突帯 突帯は貼り付け方法の差異で、結果として断面形状が異なる。A～Fに分類した(下図参照)。

- A) 上下ナデつけ→断面台形
 B) 上下ナデつけ→断面三角形
 C) 上下・凸部ナデつけ→断面台形
 D) 上下・凸部ナデつけ→断面平台形
 E) 上下ナデつけ、凸部押しつけ→断面山形台形
 F) 上下ナデつけで、その後上部のみハケ→断面変形台形(朝顔形埴輪に多い)



突帯断面形状模式図

上記分類のうち、「AとB」は同一の貼り付け方法であり、結果として断面形が異なるだけである。また「CとD」の場合も同様である。よって、同一資料においても両者が混在することがあった。さらに「AとC」の混在も確認された。

透孔 全て円形である。半円を指向するようなものもあったが、明らかな半円透孔は確認できなかった。

胎土 混入物としては、「石英」「チャート」「輝石または角閃石」はほぼ全ての資料で確認できたほか、「灰白色鉱物」「白色粒子」「赤褐色粒子」が多くの資料で確認できた。また、全体的には砂礫ととにかく多量に含まれている。なお、全資料の5%にも満たない資料数であるが、結晶片岩を含む資料が存在することも確認できた。

朝顔形埴輪

全体の形態 朝顔埴輪は全体が窺えるものはない。

成整形 外面はタテハケ、内部はナデ後、ハケを施している。赤彩は外面に施されている。

突帯 上記、円筒埴輪での分類では「FとC」が確認されている。

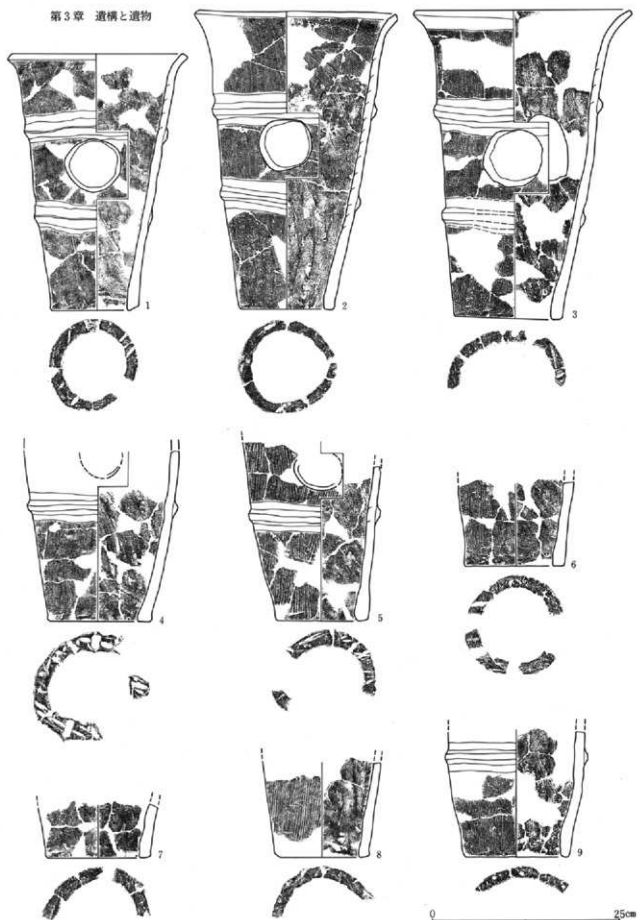
透孔 円形が確認されている。

胎土 円筒埴輪の胎土と同様である。

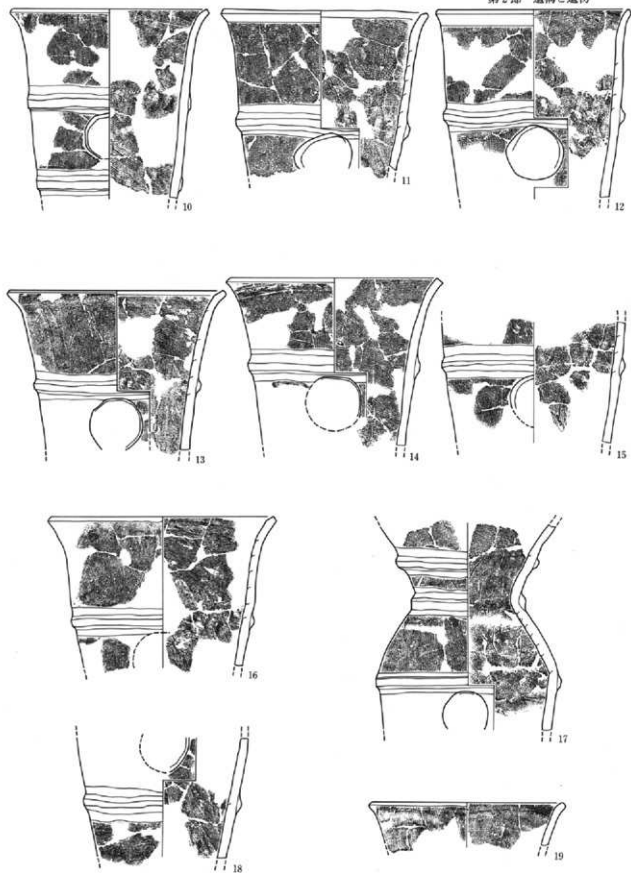
家形埴輪

破片が3点出土している。壁と棟部の破片である。小片のため屋根構造は特定できない。

土師器 口縁が外斜する模倣坏である(第13図)。

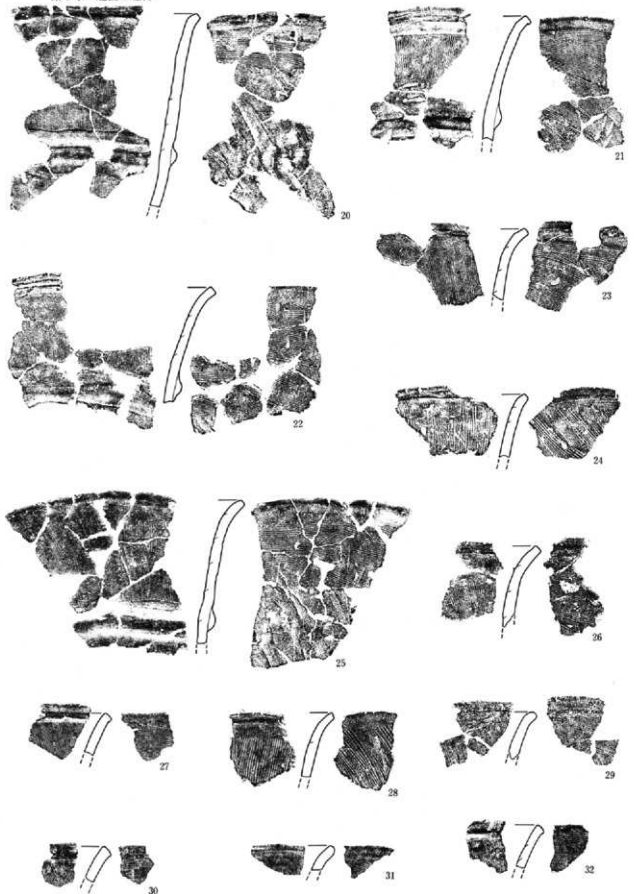


第6図 1号墳出土遺物(1)



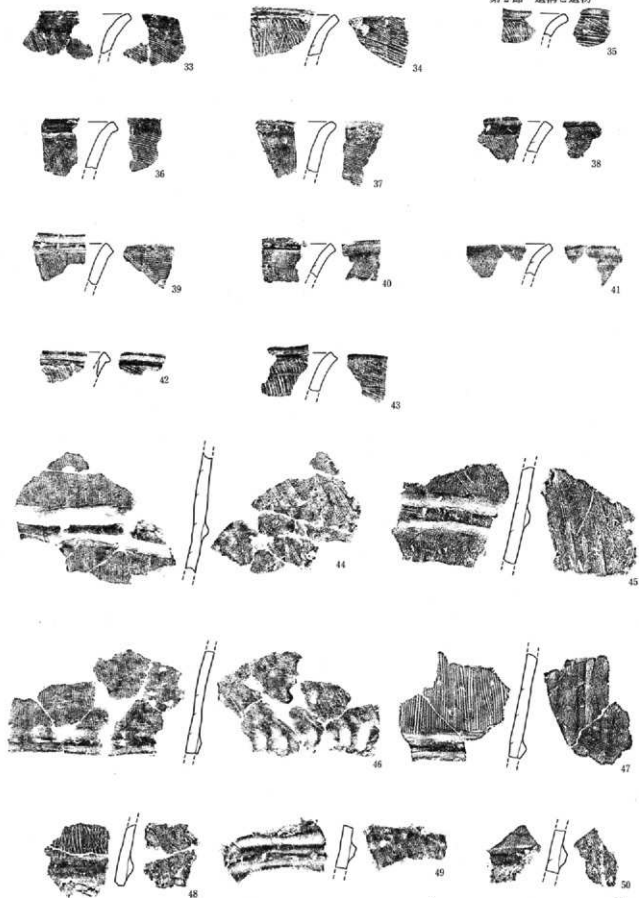
第7图 1号墳出土遺物(2)

0 25cm



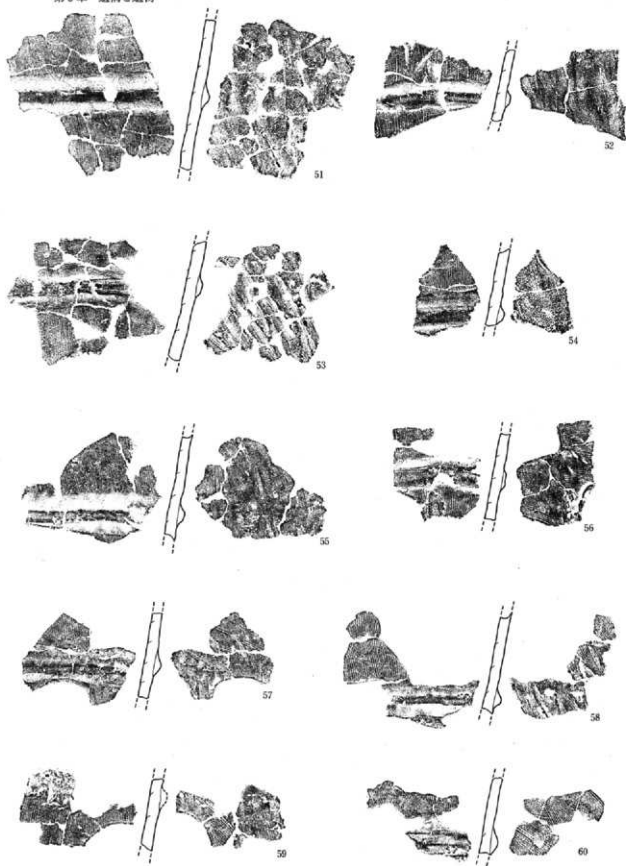
第8图 1号墳出土遺物(3)

第2節 遺構と遺物

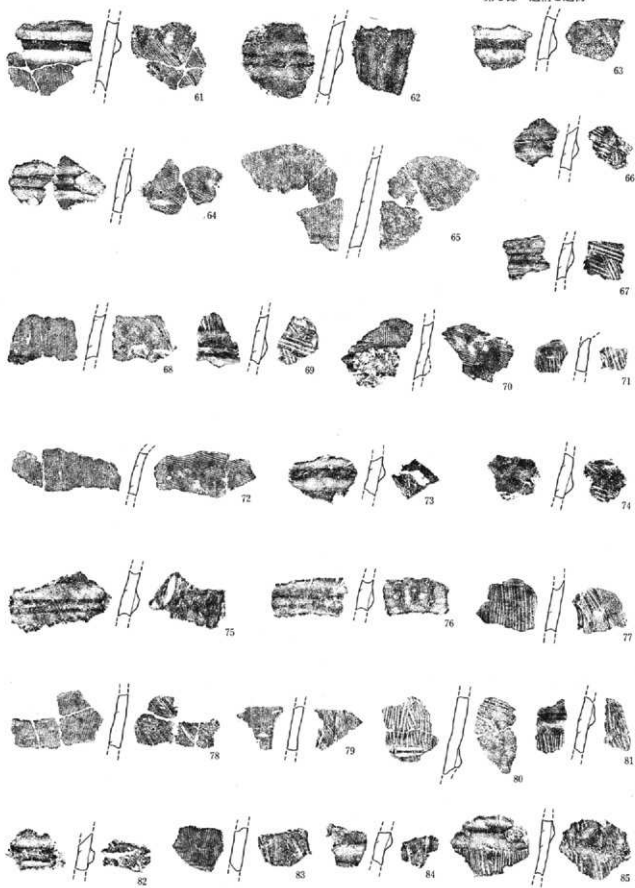


第9図 1号墳出土遺物(4)

0 20cm



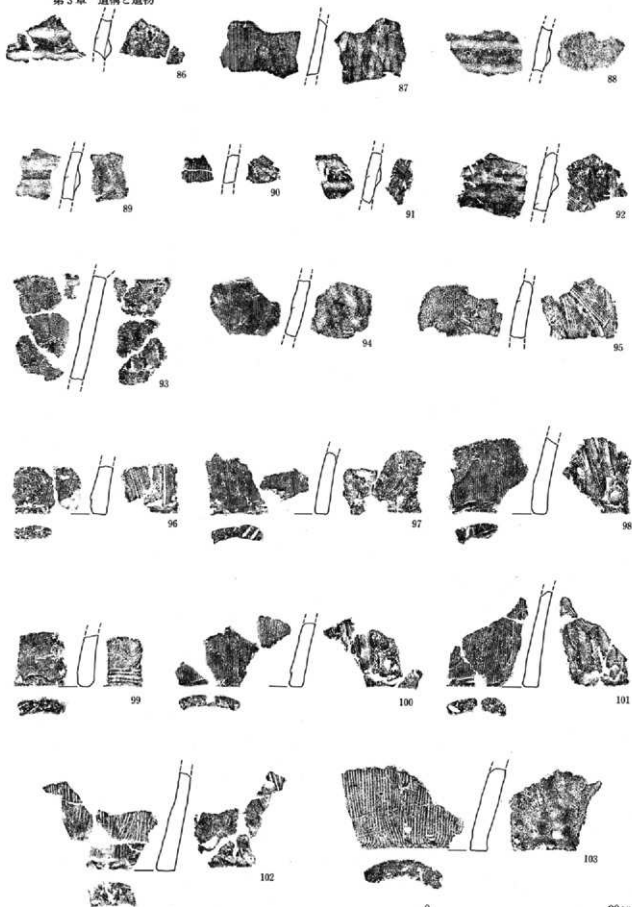
第10図 1号墳出土遺物(5)



第11圖 1号墳出土遺物(6)

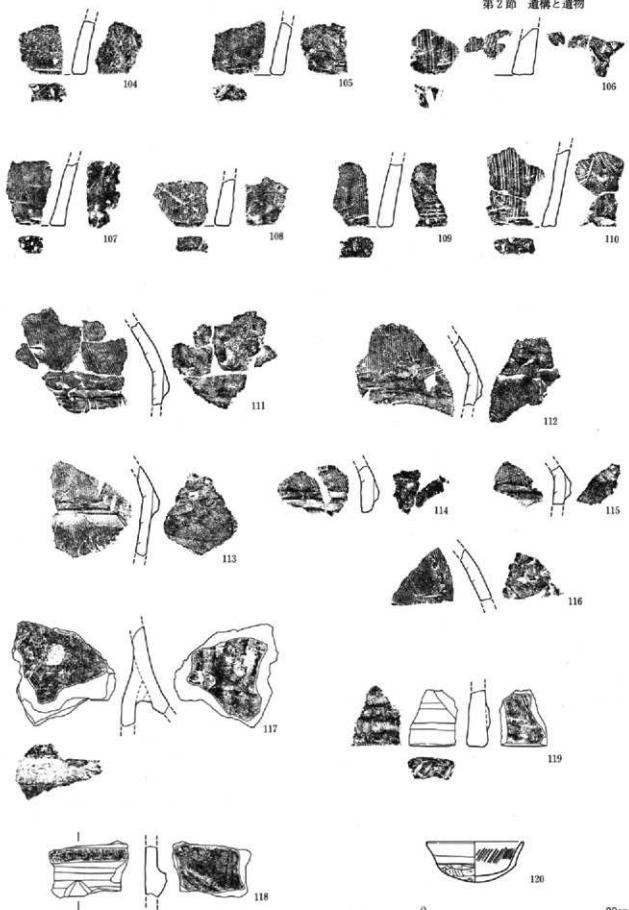
0 20cm

第3章 遺構と遺物



第12図 1号墳出土遺物(7)

0 20cm



第13図 1号墳出土遺物(8)

0 20cm

第3章 遺構と遺物

古墳周堀出土遺物観察表

【観察表の記載について】

遺物番号—古墳時代遺物として、「1」から「120」まであり、各図版に対応している。

法量——不明なものには「—」、復元値は「()」とつけてある。

実測形状—記載された「A」から「F」までは、本文9頁「実測断面形状模式図」に対応している。

掘入物—内堀で観察できるものを記載した。なお、「礫石」と「角礫石」は区別が明確だったため、両者の区別はつけて、一律に併記することとした。

遺物番号 図版番号	種類	法量 (cm) 高/口/深	段高 (cm) 3/2/2	実測 形状	透孔 形状	ハチ 長 (cm) 外/内	掘上の特徴		形態及び外面の装飾的特徴			その他
							色調	掘入物	①形態	②外面	③内面	
1 第6図 P.L.10	普通 円筒	34.0 24.5 12.0	9.9 12.2 12.4	A B	円形	6~7条 6~7条	褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色鉱物・赤褐色粒 子・赤褐色粒子	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→彫いタナメハケ→口縁付近のみヨコナデ			—
2 第6 図 P.L.10	普通 円筒	38.8 27.9 12.5	12.3 12.2 14.3	A	円形	6~7条 6~7条	黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→タナメハケ→口縁付近のみヨコナデ			赤彩(外堀)
3 第6図 P.L.10	普通 円筒	41.6 29.4 14.0	12.5 13.0 14.1	A C	円形	8~9条 7~9条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→彫いタナメハケ→口縁付近のみタナメハケヨコナデ			赤彩(外堀)
4 第6図 P.L.10	普通 円筒	— — —	— — —	A	円形?	8~9条 8~9条	黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①直線的に閉じ ②一次タタキハケ ③タナデ→彫いタナメハケ			—
5 第6図 P.L.10	普通 円筒	— — —	— — —	E	円形?	3~4条 3~4条	淡黄色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	①直線的に閉じ ②一次タタキハケ ③タナデ→彫いタナメハケ			—
6 第6図 P.L.10	普通 円筒	— — —	— — —	—	—	6~7条	明黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ ③タナデ			—
7 第6図 P.L.10	普通 円筒	— — —	— — —	—	—	6~7条	淡黄色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①直線のみのため不明 ②一次タタキハケ ③タナデ			—
8 第6図 P.L.10	普通 円筒	— — —	— — —	—	—	5~6条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色粒子・赤褐色 粒子・白色粒子・結晶片目	①直線のみのため不明 ②一次タタキハケ ③丁寧なタナメハケ			—
9 第6図 P.L.10	普通 円筒	— — —	— — —	C	—	8~9条 8~9条	褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①直線のみのため不明 ②一次タタキハケ ③タナデ→彫いタナメハケ			—
10 第7図 P.L.10	普通 円筒	— 27.0 —	— 12.0 —	D	円形	6~7条 3~8条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→タナメハケ→口縁付近のみヨコナデ			赤彩(外堀・ 内堀?)
11 第7図 P.L.10	普通 円筒	— 28.0 —	— 14.2 —	C	円形	7~9条 8~9条	淡黄色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→彫いタナメハケ→口縁付近のみタナメハケヨコナデ			赤彩(外堀)
12 第7図 P.L.10	普通 円筒	— (26.0) —	— — —	A	円形	8~9条 8~9条	褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→彫いタナメハケ→口縁付近のみタナメハケヨコナデ			—
13 第7図 P.L.10	普通 円筒	— 28.0 —	— 12.3 —	A C	円形	8~9条 8~9条	明黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子・片岩?	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→彫いタナメハケ→口縁付近のみタナメハケヨコナデ			赤彩(外堀・ 内堀?)
14 第7図 P.L.11	普通 円筒	— (28.0) —	— 11.6 —	A C	円形	6~7条 6~7条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→上形タタキハケ→口縁付近のみタナメハケヨコナデ			赤彩(外堀)
15 第7図 P.L.11	普通 円筒	— — —	— — —	A	円形	8~9条 7~9条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子・片岩?	①直線的に閉じ ②一次タタキハケ ③タナデ→彫いタナメハケ→口縁付近のみタナメハケ			赤彩(外堀)
16 第7図 P.L.11	普通 円筒	— (30.0) —	— 13.8 —	A	円形?	7~8条 7~9条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①直線的に閉じ、口縁部で外反する ②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→上形タタキハケ→口縁付近のみタナメハケヨコナデ			赤彩(外堀)
17 第7 図 P.L.11	銅網 円筒	— — —	— — —	F C	円形?	5~8条 7~8条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子	①円筒部にはほぼ直線的に立ち上がり、胴部には直線的に閉じ ②円筒部、胴部はタタキハケ 胴部はタナメハケ ③口縁部はタナメハケ 胴部はヨコナデ 胴部はタナメハケ			赤彩(外堀)
18 第7図 P.L.11	普通 円筒	— — —	— — —	A	円形?	8~9条 8~9条	淡黄色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子・片岩?	①直線的に閉じ ②一次タタキハケ ③タナデ→タタキハケ			—
19 第7図 P.L.11	普通 円筒	(26.0) — —	1.5 — —	—	—	8~9条 8~9条	褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子・片岩?	②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→タナメハケ→ヨコナデ			赤彩?(外 堀)
20 第8図 P.L.11	普通 円筒	(26.0) — —	14.6 — —	C	円形	7~8条 7~8条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→タタキハケ→口縁付近のみタナメハケヨコナデ			赤彩?(外 堀)
21 第8図 P.L.11	普通 円筒	(27.0) — —	10.5 — —	A	—	7~8条 7~9条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→タナメハケ→ヨコナデ			赤彩(外堀)
22 第8図 P.L.11	普通 円筒	(25.0) — —	10.3 — —	A	円形?	7~8条 7~8条	淡黄褐色	石英・チャート・礫石・角 礫石・白色粒子・赤褐色粒 子・赤褐色粒子	②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→タナメハケ→ヨコナデ			赤彩(外堀)
23 第8図 P.L.11	普通 円筒	(28.0) — —	— — —	—	—	8~9条 8~9条	淡黄色	石英・チャート・礫石・角 礫石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	②一次タタキハケ→口縁ヨコナデ ③タナデ→タナメハケ→ヨコナデ			赤彩(外堀)

第2節 遺構と遺物

遺物番号 図版番号	種類	法量(cm) 高/1/底	径間(cm) 3/2/基	突帯 形状	透孔 形状	ハケ (本/高 外/内)	土上の習性		形態及び外面の成層的特徴 ①断面 ②外面 ③内面	その他
							色調	混入物		
24 第8図 P.L.11	普通 内面	--	--	--	--	4~5条 褐色	にぶい黄 褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	
25 第8図 P.L.11	普通 内面	28.0	12.4	--	C 円形?	8~9条 7~8条	にぶい黄 褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→②タタハケ→②線ヨコナデ ③タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
26 第8図	普通 内面	--	--	--	--	6~7条 6~7条	にぶい黄 褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	--
27 第8図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ(鑑定)→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
28 第8図	普通 内面	--	--	--	--	6~7条 6~7条	褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	--
29 第9図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	にぶい黄 褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ(鑑定)→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
30 第9図	普通 内面	--	--	--	--	8~9条 8~9条	にぶい黄 褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
31 第9図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ(鑑定)→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
32 第9図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
33 第9図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子・赤褐色粒子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
34 第9図	普通 内面	--	--	--	--	3~4条 3~4条	浅黄色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
35 第9図	普通 内面	--	--	--	--	3~4条 3~4条	褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ(鑑定)→ナメハケ→ヨコナデ	--
36 第9図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
37 第9図	普通 内面	--	--	--	--	6~7条 6~8条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
38 第9図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ(鑑定)→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
39 第9図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ(鑑定)→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
40 第9図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
41 第9図	普通 内面	--	--	--	--	7~8条 7~8条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
42 第9図	普通 内面	--	--	--	--	4~5条 4~5条	褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ(鑑定)→ナメハケ→ヨコナデ	--
43 第9図	普通 内面	--	--	--	--	3~4条 5~6条	褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ→①線ヨコナデ ②タタナデ(鑑定)→ナメハケ→ヨコナデ	--
44 第9図	普通 内面	--	--	A C	円形	6~7条 6~7条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ ②タタナデ→ナメハケ→ヨコナデ	赤影(外面)
45 第9図 P.L.12	普通 内面	--	--	C	円形?	8~9条 8~9条	にぶい黄 褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・灰白色鉱物・白色粒 子・赤褐色粒子	①一次タタハケ ②タタナデ→ナメハケ	突帯のみ、 浅黄色粘土 を使用
46 第9図 P.L.12	普通 内面	--	--	C D	円形?	6~7条 6~7条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ ②タタナデ→ナメハケ	赤影(外面)
47 第9図 P.L.12	普通 内面	--	--	A B	--	6~7条 6~7条	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ ②タタナデ	--
48 第9図	普通 内面	--	--	A	円形	3~4条 不明	浅黄褐色	石炭・チャート・輝石・角 閃石・白色粒子・赤褐色粒 子	①一次タタハケ ②タタナデ→ナメハケ	赤影(外面)

第3章 遺構と遺物

遺物番号 (図録番号)	種類	法泉 (cm)	段長 (cm)	突帯	透孔	ハケ (本/内)	胎土の特徴		形状及び外面の成形の特徴 ①胎形 ②外面 ③内面	その他	
							色調	混入物			
49	普通 円筒	-	-	-	C	円形?	不明	褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	②タテハケ ③タテナブ	-
50	普通 円筒	-	-	-	A	-	6~7条 6~7条	浅黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	突帯のみ。 浅黄色粘土 を使用
51	普通 円筒	-	-	-	A	円形	7~8条 7~8条	褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→①タテハケ→口縁付近のみナメハケ	赤彩(外面)
52	普通 円筒	-	-	-	A	円形?	3~4条 -	浅黄色	石灰・チャート・輝石・灰 白色粘土・赤褐色粘土・白 色粘土・結晶片岩	①一次タテハケ ②タテナブ	-
53	普通 円筒	-	-	-	C	-	6~7条 5~6条	浅黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→タテハケ	-
54	普通 円筒	-	-	-	C	円形	7~8条 -	にじみ 褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→タテハケ?	突帯のみ。 浅黄色粘土 を使用
55	普通 円筒	-	-	-	C	-	6~8条 5~8条	にじみ 褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・灰白色結晶・白色粘 土・赤褐色粘土	①一次タテハケ ②タテナブ→タテハケ	突帯のみ。 浅黄色粘土 を使用
56	普通 円筒	-	-	-	C	円形	7~8条 7~8条	浅黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	赤彩(外面)
57	普通 円筒	-	-	-	A	円形	6~7条 6~7条	浅黄色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→①タテハケ→口縁付近のみナメハケ	突帯のみ。 浅黄色粘土 を使用
58	普通 円筒	-	-	-	C	-	7~8条 6~7条	褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→①タテハケ	-
59	普通 円筒	-	-	-	?	円形?	6~7条 6~7条	浅黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	突帯は別働 している。 底帯のみ。
60	普通 円筒	-	-	-	A	-	6~7条 6~7条	浅黄色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	赤彩(外面)
61	普通 円筒	-	-	-	C	円形?	7~8条 7~8条	黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	内面に指紋 あり
62	普通 円筒	-	-	-	C	-	7~8条 -	浅黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ	突帯のみ。 浅黄色粘土 を使用
63	普通 円筒	-	-	-	C	-	6~7条 6~7条	にじみ 褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	②タテナブ ③タテナブ→コナメハケ	-
64	普通 円筒	-	-	-	D	円形?	7~8条 4~5条	褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	-
65	普通 円筒	-	-	-	-	-	6~7条 6~7条	褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	-
66	普通 円筒	-	-	-	A	円形?	3~4条 3~4条	浅黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	-
67	普通 円筒	-	-	-	C	-	?	にじみ 褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	-
68	普通 円筒	-	-	-	-	-	6~7条 7~8条	にじみ 褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	-
69	普通 円筒	-	-	-	C	-	3~4条 4~5条	浅黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	赤彩(外面)
70	普通 円筒	-	-	-	D?	-	6~7条 6~7条	にじみ 褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	赤彩(外面)
71	普通 円筒	-	-	-	-	円形?	3~4条 3~4条	浅黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	赤彩(外面)
72	普通 円筒	-	-	-	-	-	7~8条 7~8条	浅黄色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	①一次タテハケ ②タテナブ→コナメハケ	-
73	普通 円筒	-	-	-	A	-	6~7条 6~7条	浅黄褐色	石灰・チャート・輝石・角 閃石・白色粘土・赤褐色粘 土	②タテハケ ③タテナブ→コナメハケ	-

第2節 遺構と遺物

遺物番号 調査番号	種類	埋藏(深)	位置	形状	穿孔	ハチ (水/内 外/内)	土質の特徴		形状及び外面の成形の特徴 ①形状 ②外面 ③内面	その他
							色調	混入物		
74 第1100	普通 円筒	--	--	C	--	?	にぶい褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	赤彩(外面)	
75 第1100	普通 円筒	--	--	CD	--	5~6条	淡黄色	①一次タタハケ ②タナダブ	--	
76 第1100	普通 円筒	--	--	C	--	?	淡黄色	①一次タタハケ ②タナダブ	--	
77 第1100	普通 円筒	--	--	--	--	3~4条	淡黄色	①一次タタハケ ②タナダブ	--	
78 第1100	普通 円筒	--	--	--	--	6~8条 6~8条	褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	--	
79 第1100	普通 円筒	--	--	--	円形?	6~8条 6~8条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	--	
80 第1100	普通 円筒	--	--	AF	--	3~4条 3~4条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	赤彩(外面)	
81 第1100	普通 円筒	--	--	A	--	3~5条 3~5条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	--	
82 第1100	普通 円筒	--	--	C	--	6~7条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	突帯のみ、 淡黄色粘土 を被用	
83 第1100	普通 円筒	--	--	--	--	6~8条 6~8条	褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	--	
84 第1100	普通 円筒	--	--	C	円形?	8~9条 8~9条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	突帯のみ、 淡黄色粘土 を被用	
85 第1100	普通 円筒	--	--	A	--	4~5条 4~6条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	--	
86 第1200	普通 円筒	--	--	A	--	7~8条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ	--	
87 第1200	普通 円筒	--	--	--	--	6~7条	淡黄褐色	①タタハケ ②タナダブ	--	
88 第1200	普通 円筒	--	--	C	--	?	淡黄色	①一次タタハケ ②タナダブ	--	
89 第1200	普通 円筒	--	--	C	--	6~7条 6~7条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	赤彩?(外 面)	
90 第1200	普通 円筒	--	--	--	--	5~6条 6~7条	にぶい褐色	①一次タタハケ ②タナダブ	外面に「J」 状のへら編 きあり	
91 第1200	普通 円筒	--	--	D	--	?	淡黄色	①一次タタハケ ②タナダブ	赤彩?(外 面)	
92 第1200	普通 円筒	--	--	C	--	7~8条 7~8条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	--	
93 第1200	普通 円筒	--	--	--	--	7~9条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ	--	
94 第1200	普通 円筒	--	--	--	--	6~8条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ	赤彩(外面)	
95 第1200	普通 円筒	--	--	--	--	5~7条 5~7条	淡黄色	①一次タタハケ ②タナダブ→ナメハケ	--	
96 第1200	円筒	(12.0)	--	--	--	5~6条 4~6条	淡黄色	①一次タタハケ ②タナダブ→タタハケ	高部調整なし	
97 第1200	円筒	(13.2)	--	--	--	6~8条	淡黄褐色	①一次タタハケ ②タナダブ	高部調整なし	
98 第1200	円筒	(12.8)	--	--	--	6~7条 6~7条	淡黄色	①一次タタハケ ②タナダブ→タタハケ	高部調整なし	

第3章 遺構と遺物

遺物番号 図説番号	種類	法長(m) 高/口/底	段階(m) 3/2/深	尖頭 形状	透孔 形状	ハク (本/外/内)	胎土の特長		胎土の特長	形態及び外面の成整形の特徴			その他
							色調	混入物		①胎土	②外面	③内面	
99 第125図	円筒	(12.5)	—	—	—	6~8条	淡黄色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	①一次タテハケ ②タテナデ→タテハケ	—	—	—	底部調整なし。
100 第126図	円筒	(13.8)	—	—	—	6~7条 6~7条	褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	①一次タテハケ ②タテナデ→タテハケ	—	—	—	底部調整なし。
101 第128図 P.L.12	円筒	(14.5)	—	—	—	6~9条 6~7条	褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	①一次タテハケ ②タテナデ→タテハケ	—	—	—	底部調整なし。
102 第129図	円筒	(13.4)	—	—	—	4~5条	褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	②タテハケ ③タテナデ→タテハケ	—	—	—	底部調整なし。
103 第130図 P.L.12	円筒	(12.6)	—	—	—	3~4条	灰黄色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子・結晶片屑?	①一次タテハケ ②タテナデ→タテハケ	—	—	—	底部調整なし。器底に條行音。
104 第131図	円筒	(13.2)	—	—	—	?	浅黄褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	①一次タテハケ ②タテナデ→タテハケ	—	—	—	底部調整なし。
105 第132図	円筒	(13.8)	—	—	—	6~8条	灰黄色	石英・チャート・輝石・角閃石・赤褐色粘土・白色粘土	①一次タテハケ ②タテナデ	—	—	—	底部調整なし。
106 第133図	円筒	(13.0)	—	—	—	4~5条 4~5条	淡黄色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	①一次タテハケ ②タテナデ→タテハケ	—	—	—	底部調整なし。
107 第134図	円筒	(12.5)	—	—	—	8~9条	にじみ褐色	石英・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土・片屑?	①一次タテハケ ②タテナデ	—	—	—	底部調整なし。
108 第135図	円筒	(14.0)	—	—	—	4~6条	淡黄色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	①一次タテハケ ②タテナデ→タテハケ	—	—	—	底部調整なし。
109 第136図	円筒	(14.0)	—	—	—	7~8条	浅黄褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	①一次タテハケ ②タテナデ	—	—	—	底部調整なし。
110 第137図	円筒	(13.8)	—	F	—	4~5条 4~5条	浅黄褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	①一次タテハケ ②タテナデ→タテハケ	—	—	—	底部調整なし。
111 第138図 P.L.12	胴部	—	—	F	—	7~9条	淡黄色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粒子	②タテハケ ③タテナデ	—	—	—	赤影(外面)
112 第139図 P.L.12	胴部	—	—	F	—	7~8条 6~8条	浅黄褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土・片屑?	②タテハケ ③タテナデ→タテナメハケ	—	—	—	赤影(外面)
113 第140図 P.L.12	胴部	—	—	F	—	6~8条 6~7条	浅黄褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土・片屑?	②タテハケ ③タテナデ→タテナメハケ	—	—	—	赤影(外面)
114 第141図	胴部	—	—	F	円形	6~8条	淡黄色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土・片屑?	②タテハケ ③タテナデ	—	—	—	赤影(外面)
115 第142図	胴部	—	—	—	—	6~8条 6~8条	浅黄褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土	②タテハケ ③タテナデ→タテナメハケ	—	—	—	赤影(外面)
116 第143図	胴部	—	—	—	—	8~9条	淡黄色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土	②タテハケ ③タテナデ	—	—	—	赤影(外面)
117 第144図 P.L.12	形象 (器)	—	—	—	—	6~8条	褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土・結晶片屑?	②ナデ→タテハケ ③ナデ	—	—	—	履帯及び雲母の一部が残存。
118 第145図 P.L.12	形象 (器)	—	—	—	C	6~8条	褐色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土・結晶片屑?	②ナデ→タテハケ ③ナデ	—	—	—	履帯の一部が残存。
119 第146図 P.L.12	形象 (器)	—	—	—	D	—	淡黄色	石英・チャート・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土	②ナデ ③ナデ	—	—	—	履帯(底面含む)の一部が残存。

遺物番号 図説番号	種類	法長(m) 高/口/底	胎土の特長		胎土の特長	形態及び外面の成整形の特徴			その他			
			色調	混入物		①胎土	②外面	③内面				
120 第150図 P.L.12	土部 器坪	5.2 13.0	—	—	—	褐色	石英・輝石・角閃石・白色粘土・赤褐色粘土	①口縁部はわずかに内湾突状に、外斜する。瓦底 ②口縁部は同軸ナデ。体部は手持ちヘラケズリ ③口縁部はナデ。体部は不明。その後装飾ヒモギ	—	—	—	—

2 中近世の遺構

溝

1号溝

調査区中央やや南寄りを東西に走る溝である。全長25.7m、幅は最も広いところで1mであるが、後述の石組み護岸の内法で測ると約50cmである。深さは削平によって浅くなり、特に3号溝を越えるところはとぎれてしまっているが、東端付近で測ると約25cmである。西端は池に合流する。合流部がきわめて浅くなっていたため、断面観察では池との新旧関係を確認できなかったが、平面的な土層観察からは両者は同時期に存在していたものと思われる。東端は2号溝に合流するが、こゝも合流部に擾乱が入っていたため、断面観察で新旧関係を確認できなかった。しかし、①2号溝を越えていないこと、②合流部のやや南側で2号溝の底が高くなっていて、ここに何らかの施設があった可能性があること、というふたつの理由から、両者も同時期に存在していたものと思われる。そのため、この溝が池と2号溝をつなぐ施設であると判断できるが、底の標高を見ると西端と東端との差はほとんどないので、水が流れる方向を明確にすることはできず、池の排水溝か給水溝かは確定できない。

両岸には特に東端付近で顕著のように石が並んでおり、本来石組みの護岸がされていたらしい。東端の合流部付近には石と煉瓦状の土製品が底に並べられていた。これは浸食を防ぐための工夫であったと思われる。

出土遺物から幕末の再建前橋城の時期のものと思われる。

2号溝

調査区東端付近を南北に走る溝である。調査区を横断してさらに南北に伸びており、今回はそのうちの長さ約15m分を調査することができた。幅0.8～1m、深さ約0.7mで、断面は逆台形形をしている。1号溝との合流点からやや南で底が高くなっていて、ここに何らかの施設があった可能性があるが、ほかに顕著な痕跡が見られなかったため、どのような施設かは不明である。再建前橋城の絵図面では調査区の東側は道路になっているため、この溝はその道路側溝である可能性が考えられる。底の標高にはあまり差がなく、流水の方向は明らかではない。

出土遺物から幕末の再建前橋城の時期のものと思われる。

3号溝

調査区の中央部を南北に走る溝である。調査区には長さ約14m分がかかっているのみで、さらに南北に伸びている。北端部分に建物基礎のコンクリートがあるため、この部分の調査はできなかった。断面観察から2時期あることが判明し、新しいものをA、古いものをBと呼び分けた。まずBが掘られ、それが埋められた後、西に少しずらしてAを掘っている。確認面におけるAの上面幅は2m、深さは1.2mで、底は幅0.5mの平坦面を作っている。Bもほぼ同じ形状であるが、上面は広がって幅は推定3mあり、深さも1.5mでやや深い。Bには大量の石が投げ込まれており特に南側で数が多かったが、特に組んでような状況は後述の一部を除いてみることでできず、石垣などの施設とは認められなかった。この石は、Aを調査した際に東壁に現れたが、そのうちのごく一部が石垣状に積まれていたため、調査当初、3A溝の護岸として石垣を組んだものと思われた。しかし、その後3Bの中に大量の石が投げ込まれていることが判明したことから、3Aの掘削時に壁の表面に出てきてしまった石を、崩れないように一部組み直して石垣状にしたものと判断した。この石垣状に組み直したのは、中央部の長さ1.5mの範囲だけで、上下3段に石を組んでいる。その下側や裏側、さらにその北側、南側にはこのような人為的な石組みを認めることができない。

時期は酒井氏前橋城時代と考えられ、18世紀後半には埋められた遺構である。

建物跡

建物跡は3棟あり、調査区南側にある。しかし、いずれも柱穴3～4個が1列に並んでいるだけなので、実際には「建物」と断定することはできず、目隠し塀のような短い塀の跡である可能性も残されている。ここでは、その可能性は残しつつも、それらの柱列は北側の柱筋であり、南側に建物が建てられているのだと判断して「建物跡」と扱うことにした。出土遺物はいずれも少なく、時期を特定するのは困難である。

1号建物跡

3間、つまり4本分の柱穴からなるものである。方位は西側で北に13度傾いている。このような方位は調査区北側にある空堀や再建前橋城以前の絵図面に見える調査区付近の東西区画の方向に近いので、再建前橋城以前の時期のものである可能性がある。再建前橋城の絵図面では東西区画の方向はほぼ正確な東西方向になっているためである。それぞれの柱穴は直径30～40cm、深さ10～20cmで、中に上面がほぼ平坦な自然石（直径20～30cm）が入っていて、それを礎石としている。西端から2個目の礎石には上面に柱の痕跡がごく薄く残っており、それをみると一辺約12cm（4寸）の角材であるらしい。柱間隔は両脇が3.8mあるのに対して、中央が4mとやや広くなっており、合計11.6mである。

2号建物跡

2間、つまり3本分の柱穴からなるものである。方位は1号建物跡とほぼ同じであり、近い時期のものと思われるが、ごく近くにあるため同時存在はあり得ない。新旧関係は不明である。柱穴は直径20～30cm、深さ10～20cmで、両端に礎石と思われる自然石が入れられている。柱間隔は西端から中央が1.7m、中央～東端が2.1mで合計3.8mである。

3号建物跡

2間、つまり3本分の柱穴からなるものである。方位は前2者とは異なり、ほぼ正確な東西方向を向いているため、時期が大きく異なるものかもしれない。柱穴は直径20～25cm、深さ10～20cmであり、礎石を全くもたない点も前2者と異なる。柱間隔は西端～中央が1.75m、中央～東端が1.9mで合計3.65mである。

井戸

井戸は4基あった。いずれも素掘りの円形のものであり、井戸枠などは見られない。

1号井戸

調査区中央南側にある。直径0.85～1.5m、深さ3.7m。水口は上下2カ所に見られた。

2号井戸

1号井戸から北西に約1m離れたところにある。3号溝を切り、1号溝に切られているので、その間の時期のものである。直径0.7～1.2m、深さはやや浅く2m。

3号井戸

調査区の西部にある。直径1.8～1.9m、深さ4.5m。丸い形を保ったまま垂直に掘っている。

4号井戸

3号井戸から西に約60cm離れたところにある。上面が直径2.1～2.4mと大きい。深さ約30cmで急に狭くなり、直径1.0～1.4mになる。深さは2.8mである。

池跡

調査区南西隅にある池の跡である。調査当初湾曲した溝と考えたが、底の形状から池と判断した。ただし、調査区にかかっているのは全体の一部のみであり、全体の形状は不明である。断面観察から2時期あることが分かり、古い時期をB、新しい時期をAと呼び分けた。Bの時期の池は北東部に残っているのみであり、新しい池はこの部分では少し南側に移動している。底には凹凸があるので深さは一定ではないが、ほぼ30～40cm位のところが多く、あまり深い池ではない。両者の岸付近には10cm大の石が多く見られるため、粗い石組みの護岸があったものと思われる。

Bの埋土からは幕末までの陶磁器が出土したが、Aの埋土からは少数だが板ガラスや顕微鏡のスライドガラスなどが出土したため、この池は幕末に掘られたのち、少なくとも明治時代までは池として使われていたものと思われる。Aの時期の池には中島とその護岸の材木、そこにかかる橋の橋脚と思われる杭、魚の越冬用の深みと思われる穴などが見られ、これらもこの遺構が池と判断する根拠となったが、これら池の諸施設がBの時期、すなわち、幕末まで通るかどうかは明らかではない。

先述の1号溝はBの時期に合流している。Aの時期の給排水溝がどこにあるかは不明である。

土坑

土坑は3基調査した。そのうち1号土坑は多数の石を上面が水平になるように詰めていたため、何らかの意味を持つ遺構と思われたが、石をはずしたところ埋土からプラスチック片が出土し、戦後のものであることが判明した。そのためこの1号土坑は調査対象から外すことにしたので、ここでは残りの2基を報告する。出土遺物などは少なく、時期・性格ともに不詳である。

2号土坑

調査区西側、3・4号井戸のすぐ南にある。長径85cm、短径65cmの楕円形で、深さは20cmである。

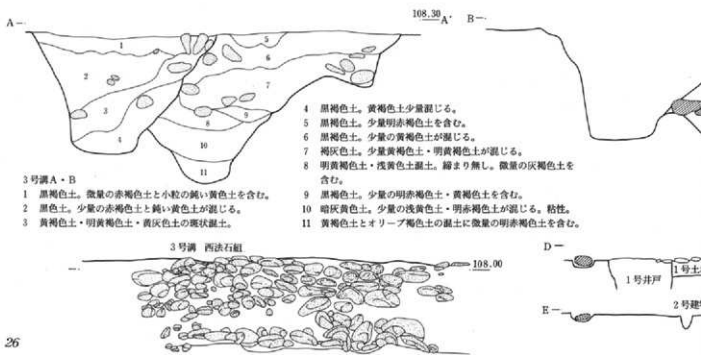
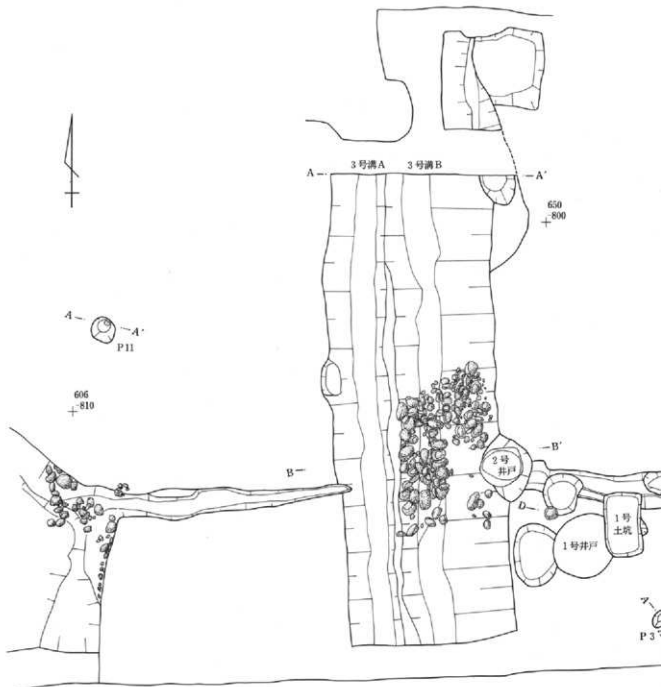
3号土坑

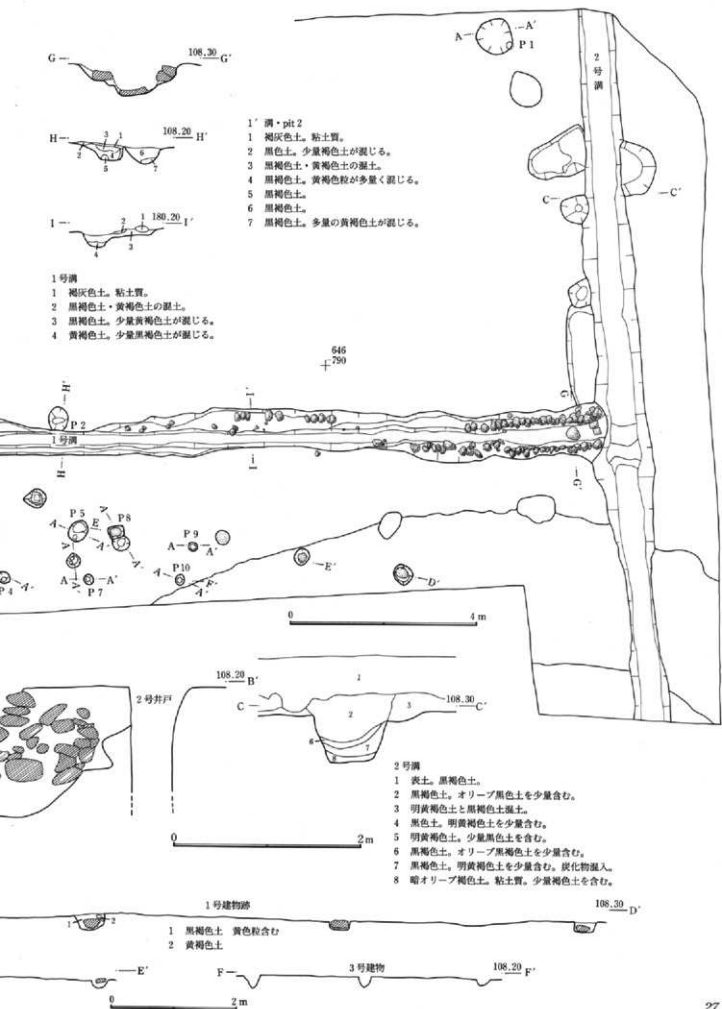
調査区西端近くにある。隅丸方形で長さ90cm、幅60cmで、深さ20cmである。

ピット

ピットは13カ所確認、調査した。そのうち、4、7、8、9、10の各ピットは2号建物跡、3号建物跡の柱穴であることがのちに判明した。そのため、ここでは欠番として扱う。遺構の小きさに比例して出土遺物が少なく、それぞれの時期は明らかではない。

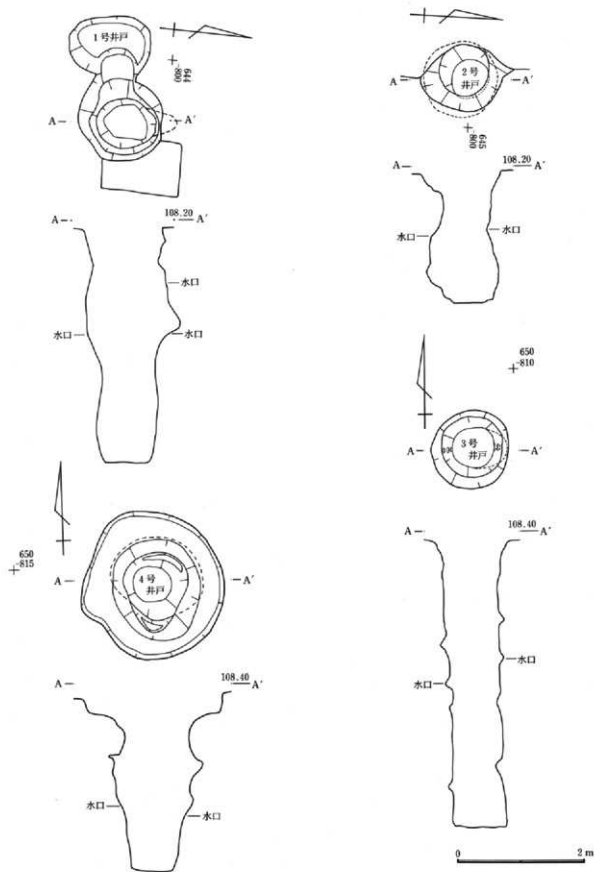
1号は直径80cm、深さ65cmで、斜めに掘り込んでいる。2号は直径50cm、深さ18cm。3号は長径40cm、短径25cm、深さ10cm。5号は長径45cm、短径35cm、深さ12cm。6号は直径25cm、深さ7cm、11号は直径50cm、深さ18cm。12号は直径50cm、深さ25cm。13号は直径25cm、深さ22cmである。



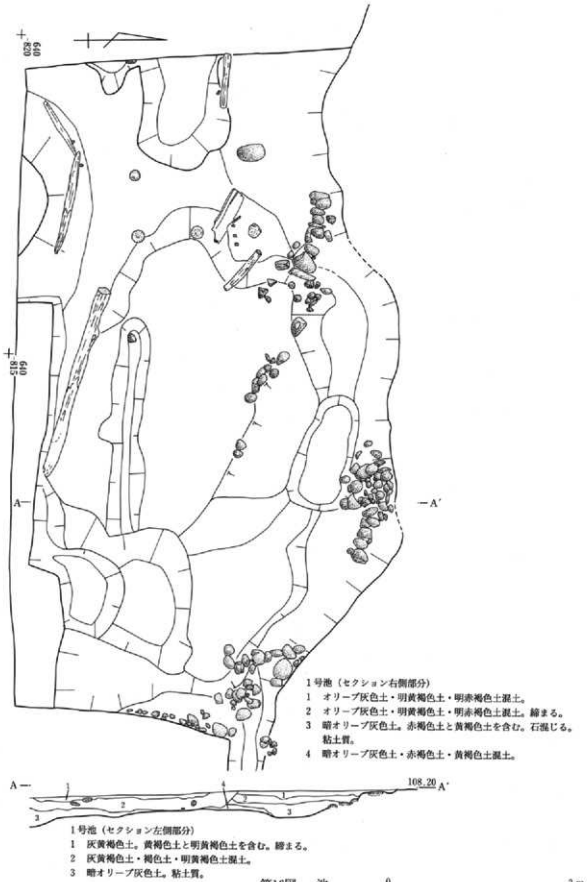


第14図 中近世遺構図(溝・建物跡・ピット)

第3章 遺構と遺物

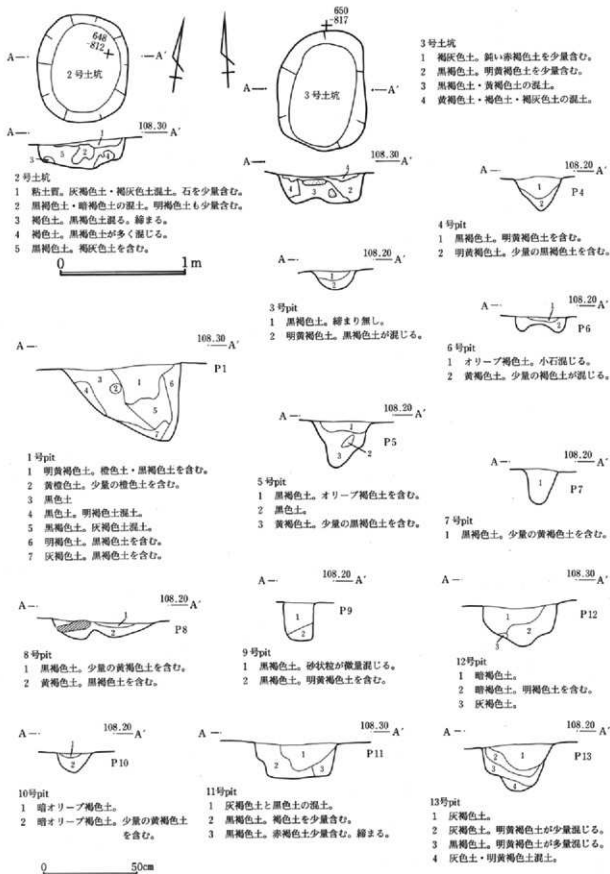


第15図 1・2・3・4号井戸



第16図 池

第3章 遺構と遺物



第17図 2・3号土坑、pit断面図

中近世遺物

本遺跡からは、溝や池を中心に陶磁器を主体とした遺物が出土している。しかし、廃城以降市街地として使用されていたために現代までの陶磁器を多く含んでいた。報告書に掲載する遺物を選択するあたり、明らかに昭和以降のものはほとんど除外し、混入の事実を示す程度にとどめた。したがって、実際より良好な状態で遺物が出土していると受け取れることを明記しておきたい。以下、特筆される点のみを略述する。

焼塩壺

今回出土した陶磁器中、轆轤成形の薄手小型焼塩壺は希少例として注目される。県内における焼塩壺出土遺跡は、前橋城・高崎城・館林城といった近世城郭に限られるうえ、轆轤成形焼塩壺の出土は高崎城三ノ丸遺跡に次いで二遺跡目となる。加えて、焼塩壺身の14点すべてが両角分類の「D-8-チ」である点から、その時期も幕末から明治10年代の小林編年Ⅷ期にあたりと考えられる。また、この年代は今回の調査で出土した陶磁器全体の傾向と矛盾せず、第4章で述べられている武家屋敷で消費されたのであろう。

前橋藩高浜窯関連遺物

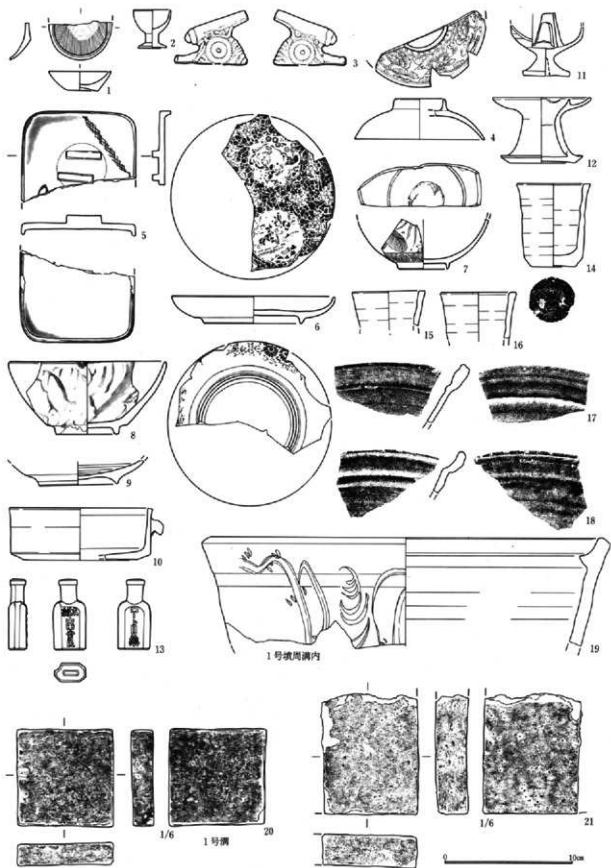
調査地点や前橋城に直接関係しないが、胎土・形状・二次的焼熱による色調から焼物窯の部材と考えられる20・21・23や匣鉢(40)の4点は、消費地としては明らかに異質な遺物である。また、丁寧な回転削りりと緻密な胎土の特徴から陶磁器の素焼段階と考えられる皿(131)も出土している。これらは、遺物の性格や出土状態から商品として流通したとは考えられず、本来使用された場所が問題となる。現段階では、調査地点から南西二百数十メートル離れた県庁北駐車場(旧前橋地方検察庁)の場所にかつて存在した前橋藩窯(高浜窯)に由来すると考えられる。高浜窯の年代を示す史料は少ないが、同じ前橋藩窯の皆沢窯が文化年間から天保年間までの操業が確認され、文政5年(1822)には両者共に民営となっていることからほぼ同様な操業年代が推測される。したがって、幕末以降の遺構から出土する点において矛盾はない。

その他の陶磁器

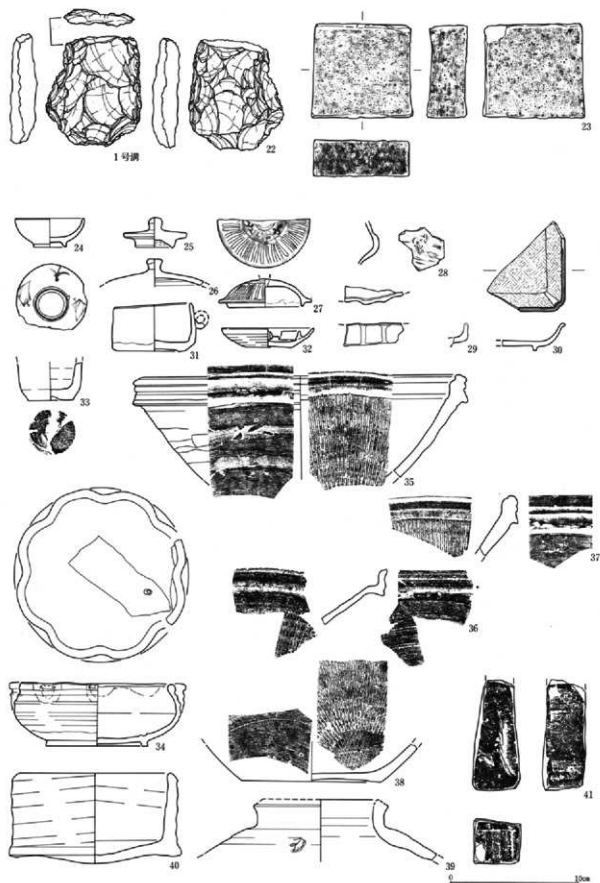
近世城郭を示す陶磁器として清刷磁器の碗が1点(170)認められる。他に、本県において非常に希少性の高い遺物として三田青磁(29)があげられよう。また、風炉に使用されたと考えられる五徳(71)や波佐見諸窯の外面褐釉磁器碗(171)も県内にもたらされていたことが判明した。

注

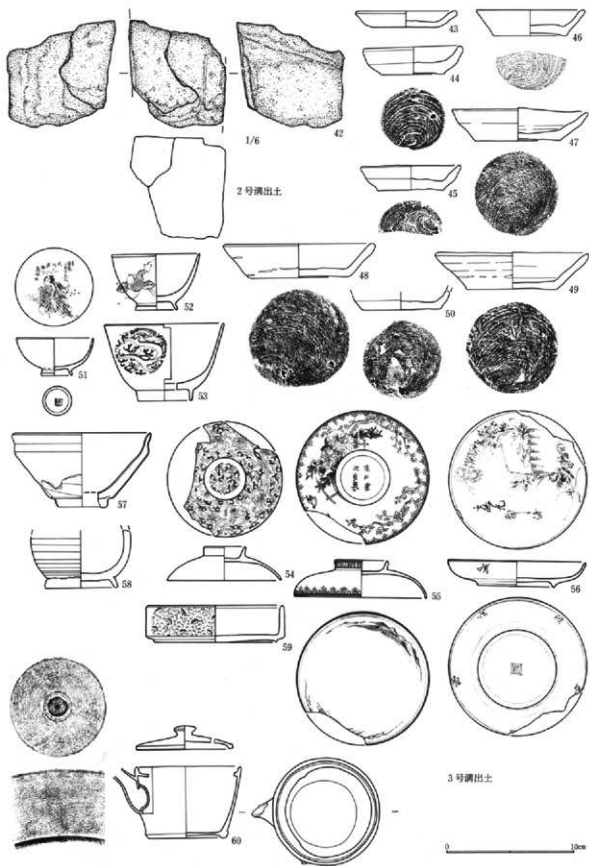
- (1) 前橋城では、群馬県教育委員会『前橋城遺跡Ⅱ』1999に「泉州麻生」銘の身2点が、前橋地方・家庭裁判所遺跡調査会『前橋城三ノ丸遺跡』1996に非轆轤成形の身3点、蓋1点が図示されている。高崎城では、高崎市教育委員会『高崎城三ノ丸遺跡』1994に非轆轤成形の身27点、轆轤成形の身19点、蓋63点が、高崎市教育委員会『高崎城遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』1990には非轆轤成形の身14点、蓋3点、高崎市教育委員会『高崎城Ⅵ(道手門)遺跡発掘調査概要』1992には「泉清伊織」銘の身が1点図示されている。館林城では、館林市教育委員会、館林市立図書館『館林双書第十七巻』平成元年に、三ノ丸土橋門で出土した「泉州……」銘の身1点の写真が掲載されている。非轆轤成形のほとんどは「泉清伊織」と「泉州麻生」銘である。
城郭以外では、「伊勢崎市上楯本町出土品」として『東京国立博物館図録目録—古墳遺物篇(関東Ⅱ)—』に「天下第一御飯器師界見」と伊織」銘の身が1点掲載されている。同銘を有する焼塩壺は県内において発掘例がなく、近世城郭や陣屋等の存在が確認されていない地で出土とされていることから本文中では触れなかった。
- (2) 小林謙一、両角まり『江戸における近世土師質磁器の研究』『東京考古10』東京考古話会 1992
- (3) 前橋藩高浜窯の場所を示す文献は、尾崎喜左衛門『群馬の地名—下巻—』上毛新聞社昭和15年のみである。本書の「横川」、「瀬戸場」の項には、前橋地方検察庁建設の際に陶磁器が大量に出土し、窯の切断面など図面をつくった旨が記されている。
- (4) 他にも中国製と思われる磁器が出土しているが、能力不足から判断できなかった。この点については後日を開きたい。



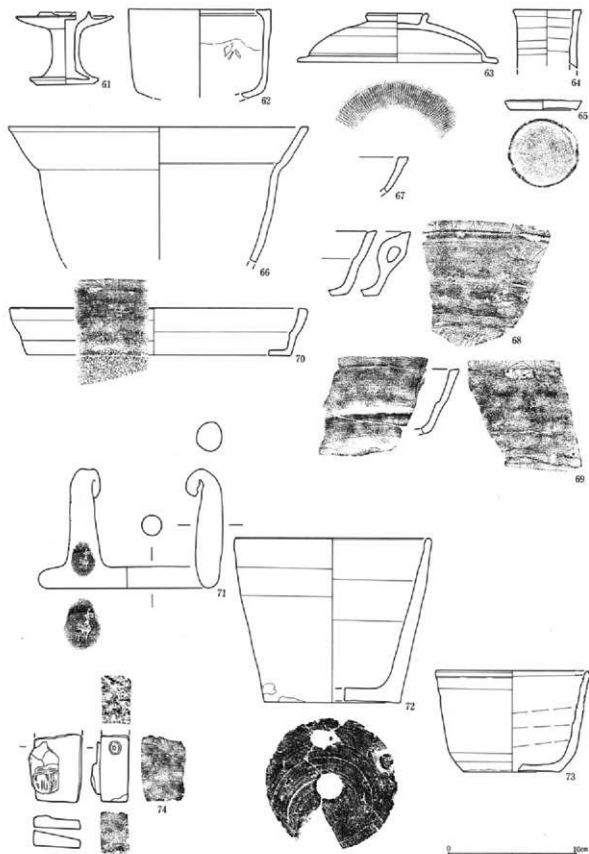
第18图 1号坑周堀(1~19)・1号溝(20・21)出土遺物



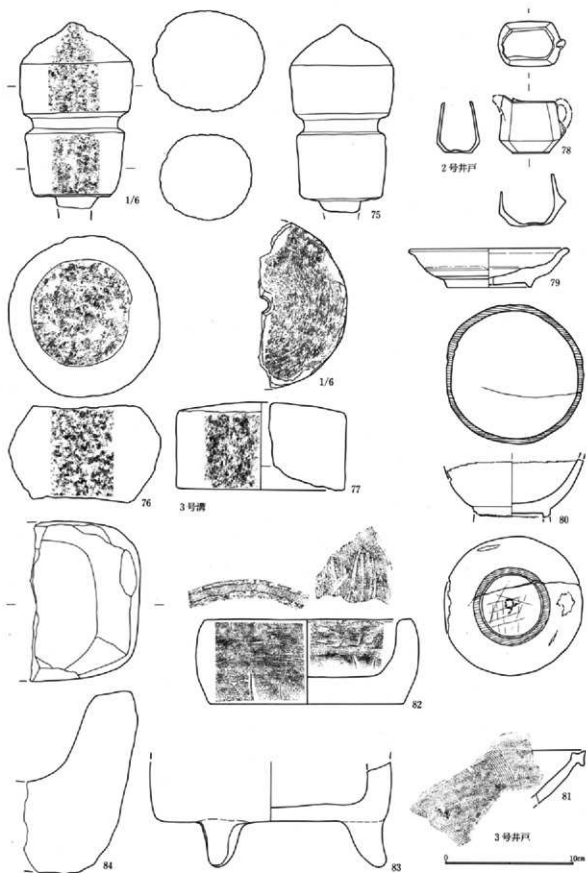
第19圖 1 (22)・2号溝(23~41)出土遺物



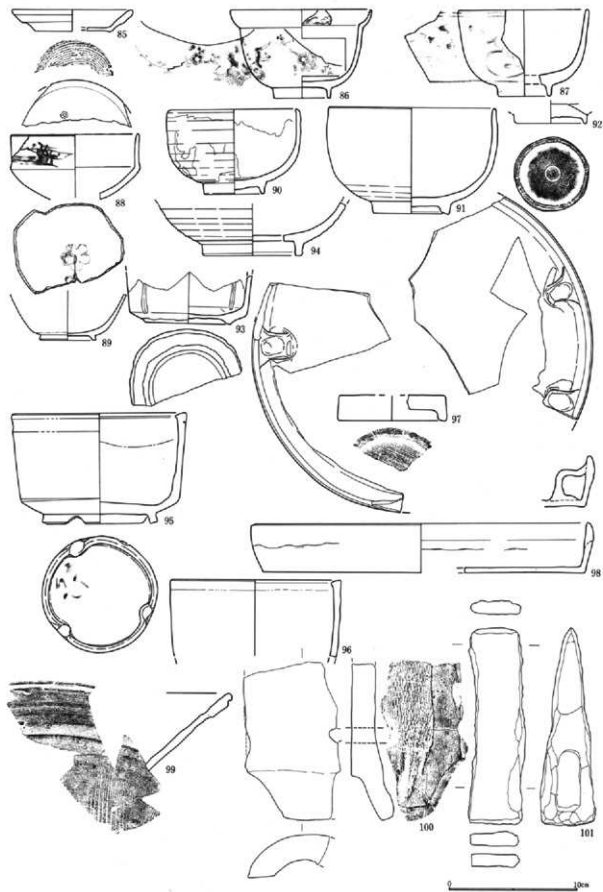
第20図 2(42)・3号溝(43~60)出土遺物



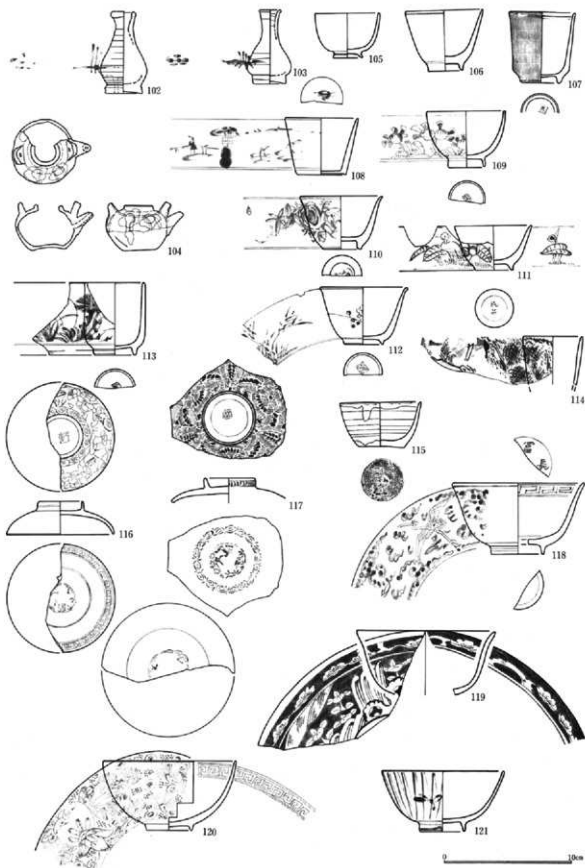
第21图 3号溝出土遺物



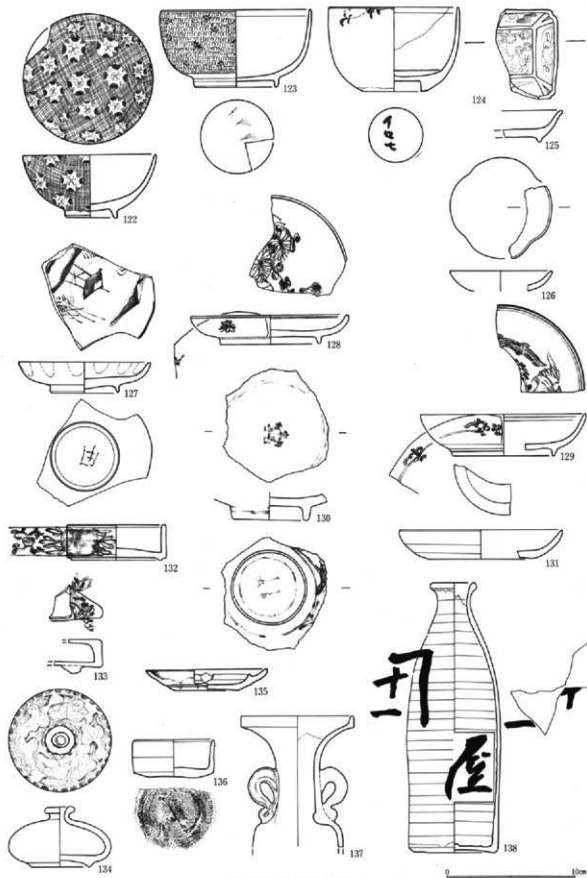
第22図 3号溝(75~77)・2号(78)・3号(79~84)井戸出土遺物



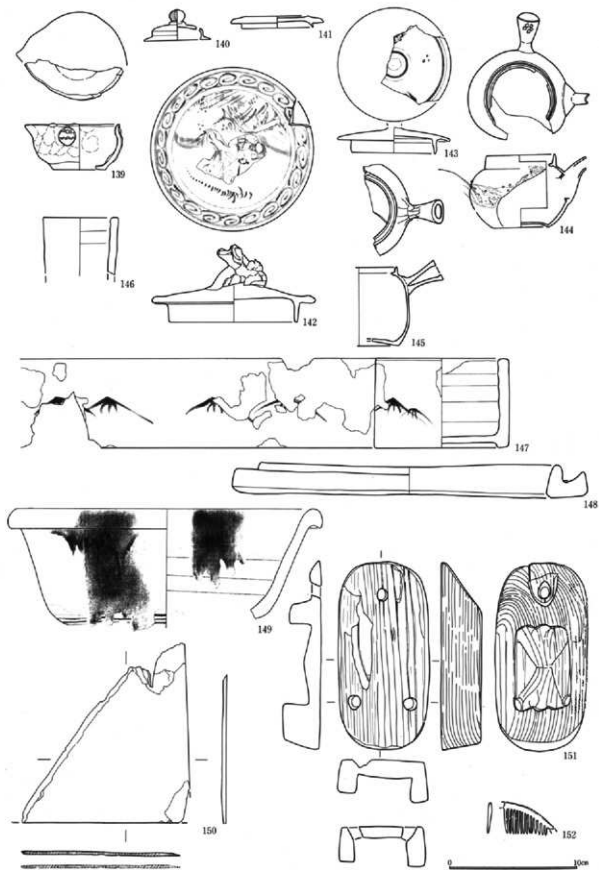
第23図 4号井戸出土遺物



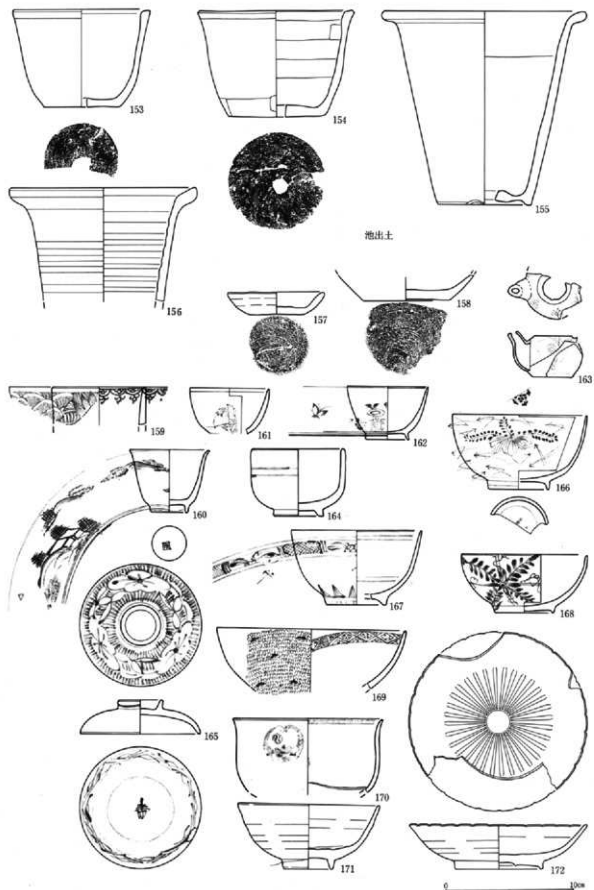
第24図 池出土遺物(1)



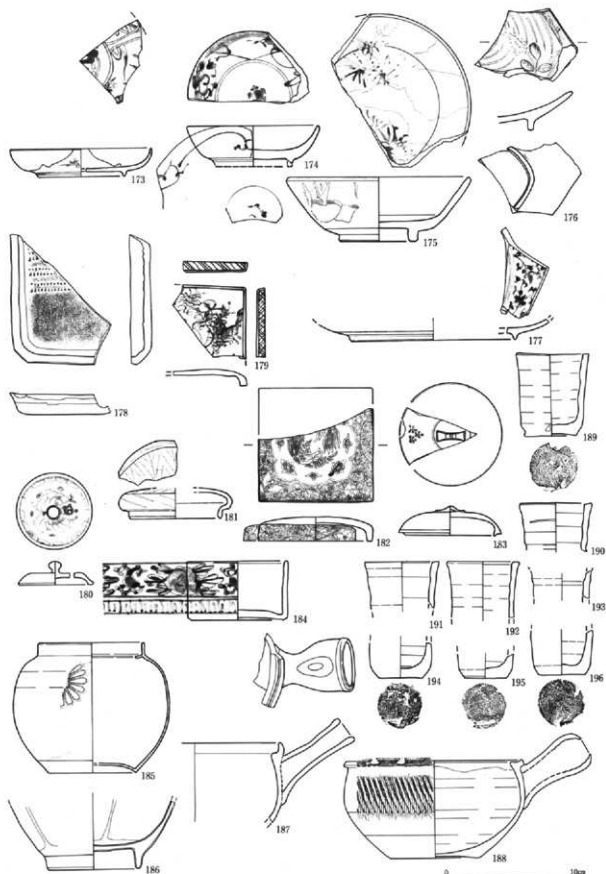
第25図 池出土遺物(2)



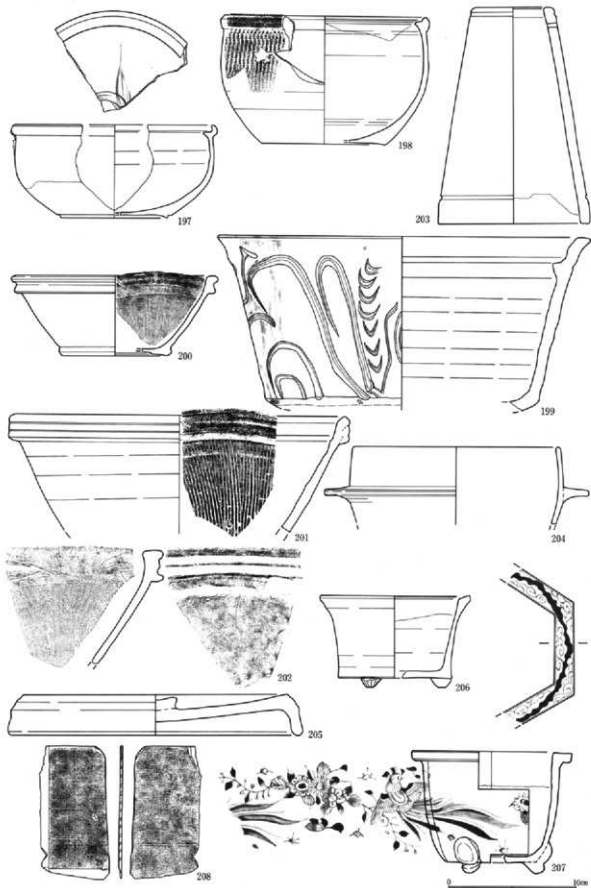
第26圖 池出土遺物(3)



第27図 池出土遺物(153~156) (4)・遺構外出土遺物(157~172) (1)



第28図 遺構外出土遺物(2)



第29図 遺構外出土遺物(3)

第3章 遺構と遺物



第30図 遺構外出土遺物(4)

石器・石造物・木器観察表

1号溝

押図番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
17-22		石器	打製石斧	撥形か基部欠損。	縄文時代

2号溝

押図番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
20-42		石造物	不明	平坦面・組み合せの段を作り出す。軽石製。	

3号溝

押図番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
22-75	14-75	石造物	五輪塔	空風輪、輪切り断面楕円形、角閃石安山岩。	中世
22-76	14-76	石造物	五輪塔	水輪、角閃石安山岩。	中世
22-77	14-77	石具	石臼	下臼、上面磨滅著しく目は消失、粗粒安山岩。	近世
22-84		石具	鉢	泡塵状付着物多くヒザ鉢に使用か。	

3号井戸

押図番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
22-80	15-80	木器	椀	黒漆塗り、底部に朱塗の文字?	

中近世出土遺物観察表

1号墳周堀

押図番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
18-1		製作地不詳磁器	白磁蓮華?	梨形し成形で、成型時に内面のみ文様を施す。底部外面無軸。底部形状と側面、先端の傾きから蓮華と推測される。	19C
18-2		製作地不詳磁器	白磁小杯	底部外面無軸。	時期不詳
18-3	13-3	瀬戸・美濃陶器	玩具	石膏製の組み合わせ型に泥漿を流し込んで成形する。底面には穴があり、中空である。黄色と赤の彩色が薄かに残る。	19C末以降
18-4		肥前磁器	染付碗蓋	文様は茶色。内面無文。	19C前から中
18-5	13-5	瀬戸・美濃陶器	織部蓋	つまみは四角柱の粘土を二本ずらして貼り付ける。つまみ周辺には浅い隈線を巡らし、これを中心とする。蓋は隅丸方形を呈すると考えられる。外面の二辺中央を結ぶように鉄絵が施され、対角線にも鉄絵が認められる。他の側には織部軸が施される。天井部内面には右正直が残る。透明軸部分の口縁部には錆軸を塗っている。	19C代か
18-6		瀬戸・美濃陶器	染付皿	内外面型紙刷り。	近現代
18-7		肥前磁器	染付碗	文様は茶色。底部内面に円形の松竹梅文を描く。	19C前から中
18-8		瀬戸・美濃陶器	刷毛目碗	高台盤に段を有し、角高台である。体部は直線的に開き、口縁部は内湾気味である。内外面に白土で文様を付けた後、灰軸を施す。高台盤以下は無軸。	19C前から中
18-9		製作地不詳磁器	白磁?皿?	高台盤以下無軸。底部と体部に焼痕あり。	不詳
18-10	13-10	製作地不詳陶器	銅鉢?	鳥の爪入れと同様な筒形で、鈎状のつまみも貼り付けるが、径が大きい。全面に透明軸を施す。焼き跡は少なく、軟質な陶器である。	19C?
18-11	13-11	製作地不詳陶器	ひょうそく	脚部側面と底面を除き透明軸を施す。底部外面右回転糸切り無調整で、中央に穿孔する。灯芯を通す部分は、蓋の中心からずれている。	19C?
18-12	13-12	製作地不詳陶器	灯明台	脚部側面と底面、内面を除き、透明軸を施す。底部外面丁平な回転磨削り。受け部に切り込みを一箇所入れる。	近現代
18-13		ガラス製品	ガラス製品	琥珀色を呈した「本舗 山田安兵衛」[「ロート日薬」]の瓶。	
18-14		瀬入系土器	焼塩杓	輪縁成形で小型。底部外面糸切り無調整。	18C末から19C
18-15		瀬入系土器	焼塩杓	輪縁成形で小型。体部下位以下欠損。	18C末から19C
18-16		瀬入系土器	焼塩杓	輪縁成形で小型。体部下位以下欠損。	18C末から19C
18-17		瀬戸・美濃陶器	水甕	外面に文様を捺刷する。内外面に灰軸を施し、外面の一部のみに刷緑軸を流す。	19C前から中
18-18		瀬戸・美濃陶器	すり鉢	口縁部は外方に屈曲した後、やや厚みを増して内湾する。錆軸は施す。	18C中
18-19	13-19	瀬戸・美濃陶器	すり鉢	口縁部は厚みを増し、外方に折れ曲がる。錆軸を施す。	19C前から中

1号溝・2号溝

押図番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
18-20	13-20	前橋藩高炊窯か	窯部材か	尖筒物の多い土で製作され、表面は色ムラが多い。一部に軸が剥がれに付着する。広い面の一面には「安立様」、もう一面には「安立女」と毛筆風の書きがある。胎土と器表の二次的被熱による色調から、陶磁器窯の窯道具か窯の部材と考えられる。	19C前から中
18-21	13-21	前橋藩高炊窯か	棚板か	直径8mm以下の襷を多く含む。陶磁器窯の棚板と同様な二次的被熱の色調である。両側面には、各三カ所耐火度の高い土付着する。一方の小口が欠損しており、全長は不明。より強く被熱した側に反っている。棚板の可能性はある。	19C前から中
19-23	13-23	前橋藩高炊窯か	窯部材か	1回じり大きくて、厚さは2倍である。器表の二次的被熱が著しく、側面が変形している。最も被熱の少ない側面に耐火度の高い土が付着する。胎土と器表の状態や色調から、焼き物窯の部材と考えられる。	19C前から中

2号溝

押図番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
19-24	13-24	肥前磁器	染付紅皿	体部外面に簡略化した文様を施す。	
19-25	13-25	磁子?	陶器蓋	厚みのある小形蓋。天井部外面に鉄軸を施す。内面中央部は窪ませる。	近代?
19-26		製作地不詳陶器	蓋	天井部外面に買入の灰白釉を施す。	

第3章 遺構と遺物

棟号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
19-27	13-27	肥前磁器	染付蓋	つまみ周辺に染付、口縁部周縁に幅広い帯を施す。染付の間は整伏工具による放射状除刻が列まれる。受け部と接する部分は無釉。	
19-28		肥前磁器	人形?	整伏?。残存部には赤・黒・青の上絵を施す。	
19-29		三田青磁?	皿?	胎土は灰白色でガラス質。釉の厚い部分は3層に分かれる。口縁部は弧状でなく、変形皿と考えられる。	
19-30		肥前磁器	白磁皿	打型成形で文様も施す。口縁部部に鉄肥を塗る。	19C
19-31	13-31	瀬戸・美濃陶器	銅鉢	灰釉を施す。口縁部と体部外面以下は無釉。体部は内楕円状に直立する。小さいリング状のつまみを貼り付ける。	19C中から後
19-32	13-32	瀬戸・美濃陶器	灯明受皿	全面に無釉を施した後、口縁部外面以下の釉を拭き取る。受け部に一箇所「U」字形の切り込みを入れる。	19C前
19-33		瀬入系土器	焼塩煮	輪縁成形。底部外面左回転糸切り無調整。口縁部欠損。	18C末から19C
19-34		製作地不詳陶器	飯能焼?皿	底部片と口縁部片を器上復元している。角高台。口縁部は丸みを持つ。口縁部は部分的に内側に変形させる。高台部以下を除き灰釉を施す。高台内面には白土を用いた黄書が認められる。	19C前から中?
19-35		堺・明石陶器	すり鉢	口縁部内面の段はやや低い。体部外面無回転削り。	18C後から19C前
19-36		丹波陶器	すり鉢	口縁部は外方に屈曲後上方に立ち上がる。	18C前。
19-37		堺・明石陶器	すり鉢	口縁部内面の段はやや低い。体部外面回転削り。	18C後から19C前
19-38		堺・明石陶器	すり鉢	体部外面回転削り後換削。	18Cから19C前
19-39		瀬戸・美濃陶器?	耳鉢	残存部には耳が一方所残る。外面無釉。	
19-40	13-40	前橋藩高浜窯?	匣鉢	復元径12.2cmの丸底匣鉢である。使用によりやや歪む。	19C前から中?
19-41	13-41		砥石	4面使用。小口	

3号溝

棟号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
20-43		在地系土器	小皿	底部外面左回転糸切り無調整。他の小皿に比して底径が小さい。	中世
20-44	13-44	在地系土器	小皿	底部外面左回転糸切り無調整。内外面の器表面で黒色を呈する。	中世
20-45		在地系土器	小皿	底部外面左回転糸切り無調整。一箇所灯芯による黒変あり。	中世
20-46		在地系土器	小皿	底部外面左回転糸切り無調整。	中世
20-47	13-47	在地系土器	皿	15・16に比してやや小型。底部外面左回転糸切り無調整。	中世
20-48	13-48	在地系土器	皿	底部外面左回転糸切り無調整。	中世
20-49	13-49	在地系土器	皿	底部外面左回転糸切り無調整。	中世
20-50		在地系土器	小皿	底部外面左回転糸切り無調整。口縁部欠損。底径やや大きい。	中世
20-51	14-51	瀬戸・美濃磁器	上絵杯	高台外面のみ染付。内面は藍色で人物と文字を描き、金の斑点を入れる。「四」と里の右側のみ赤色を使用。	近現代
20-52	14-52	瀬戸・美濃磁器?	染付小杯	高台はやや高く、外方に開く。高台内不明文様を描く。	19C前から中?
20-53	14-53	製作地不詳磁器	染付碗	外面三箇所に簡略化した龍を丸く描く。	19C前から中か
20-54	14-54	瀬戸・美濃磁器	染付碗蓋	外面とつまみ内に紫黒色の染付。	近現代
20-55	14-55	肥前磁器	染付蓋	内外面手書きによる染付。つまみ内に「関江重次良製」銘。	近現代
20-56	14-56	瀬戸・美濃磁器	染付皿	内面手書きにより、龍と花卉文を描く。	近現代
20-57	14-57	瀬戸・美濃陶器	天目茶碗	体部は直線的に開く。削り出し高台で、高台内は挟り込む。内面から外面体部下位に鉄釉を施す。口縁部の釉は厚く、胎釉に近い。釉垂れは著しく、滴状を呈したり高台まで流れる。体部外面右回転削り。	
20-58	14-58	瀬戸・美濃陶器	水注	高台部以下を除き鉄釉を施す。取っ手欠損。	
20-59	14-59	製作地不詳磁器	染付段重	外面型紙による膠の子文。高台部と口縁部内面無釉。	近代
20-60	14-60	製作地不詳陶器	急須	いわゆる高古鉢。体部外面と天井部外面に型で小さい凹凸を付ける。蓋受けは注ぎ口と反対側2/3を切って短くする。	近現代
21-61	14-61	製作地不詳陶器	灯明台	灰白色の胎土に灰釉を施す。釉には細かい塵が入る。右部内面以下と脚部底面は無釉。	19C中から後
21-62		肥前磁器	青磁香炉	高台部欠損。口縁部内面から底部外面青磁釉を施す。	17C末から18C後
21-63	14-63	益子陶器	灯明蓋	天井部内面と外面のつまみ周辺と天井部周縁鉄肥を施す。天井部外面無釉部に浅い飛び駒を施す。	近現代
21-64		瀬入系土器	焼塩煮	輪縁成形。口縁部部上面平足。	19C前から中
21-65	14-65	瀬入系土器	焼塩煮蓋	片面の周縁に高台状の高まりあり。他面には指頭庄真伏の小さい窪みあり。器面半成。径が輪縁成形焼塩煮の口径と一致し、胎土も近似する。	18C末から19C
21-66			内耳鍋	口縁部は直立気味。口縁部内面下部に段差を有する。器面黒色。外面煤付蓋。	中世
21-67			内耳鍋橋	内耳下部に段差を有する。68・69と同一体の可能性高い。	16C

第2節 遺構と遺物

検出番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
21-68			内耳焙烙	内耳一箇所残存。内耳下部に段差を有する。67・69と同一個体の可能性高い。	16C
21-69			内耳焙烙	内耳下部に段差を有する。67・68と同一個体の可能性高い。	16C
21-70		在地系土器	内耳焙烙	内耳中段に段差を有する。	江戸時代
21-71	14-71	搬入系土器	五郎	細かい胎土を使用し、焼き上がりは灰白色を呈する。1/3欠損するが、脚は三本であろう。脚部付け根の横内面に「志木」押印。その後、右に重畳するように「よか神」と型で記入する。脚が完存する脚の屈曲部先端のみ黒灰。作りがよく、お茶用の道具であろう。	近現代か
21-72	14-72	在地系土器	楕鉢鉢	平底。体部は直線的に開く。型作り轆轤調整であろう。	近現代
21-73		在地系土器	楕鉢鉢	底部左回転糸切り無調整。底部中央に水抜き孔一カ所。轆轤成形か。	近現代か
21-74			磁石?	一方の小欠損する。欠損部付近に片方から穿孔する。2面腫かを使用する。鉄製品の一部が付着する。鉄製品には木質が残る。	時期不詳

2号井戸

検出番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
22-78	15-78	製作地不詳磁器	ミニチュア	取つたと注ぎ口があり、ミルクビッチャーに似た器形である。しかし、型作り成型で、中央には裏り合わせ痕が残る。底部外面と内面は無釉。内面には型作り時の押しえ痕が明瞭に残る。素地は灰白色を呈し、土質ではない。	近現代

3号井戸

検出番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
22-79		瀬戸・美濃陶器	皿	底部内面周縁を土手状に高くし、蛇の目状に釉を掻き取る。口縁部から底部内面灰釉。	17C後
22-81		瀬戸・美濃陶器	すり鉢	内外面磨釉。内面のすり目は10本一単位で、単位ごとの間隔は広い。	
22-82		在地系土器	鉢?	胎土・焼成・色調共に瀬戸瓦と同じである。胎土には間隙があり、少なくとも真空土練器は使用していない。83とは底部の厚さが異なり、別個体である。残存部に脚はない。	近現代
22-83		在地系土器	鉢?	胎土・焼成・色調共に瀬戸瓦と同じである。胎土には間隙があり、少なくとも真空土練器は使用していない82とは底部の厚さが異なり、別個体である。残存部に脚が一つ認められる。おそらく3脚であろう。	近現代

4号井戸

検出番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
23-85		在地系土器	皿	底部回転糸切り無調整。轆轤調整。調整時の轆轤回転は左。	江戸時代
23-86	15-86	肥前磁器	鉢	外面梅花などを上絵で描く。梅花は赤、樹木などの輪郭は黒。他は青?で描く。口縁部内面には赤と青の上絵が認められる。	17C
23-87		肥前陶器	碗	陶胎染付。外面簡略化した唐草文を描く。	18C中
23-88		製作地不詳陶器	碗	口縁部は屈曲する。口縁部外面に鉄絵具で建物と樹木を描く。買入の入る透明釉を施す。底部内面に目取一カ所残存。	
23-89		製作地不詳陶器	上絵皿	高台内や高台縁の器用は丁寧である。高台縁は轆轤を有する。高台縁から内面に透明釉を施す。釉には買入が入る。底部内面には青みを帯びた上絵の具で花卉を描く。上絵具はほとんど剥落している。	
23-90		瀬戸・美濃陶器	碗	いわゆる尾呂茶碗。高台縁から内面に胎釉を施し、口縁部に基灰釉を施す。	18C中
23-91	15-91	瀬戸・美濃陶器	碗	大振りな灰釉碗。高台外面から底部内面に胎釉。貼り付け高台。	
23-92		肥前陶器	碗	京焼風陶器の底部片。底部外面丁寧な器用。高台内に「清水」の押印。	
23-93		肥前陶器?	香炉?	底部の器用は丁寧。体部の四隅は、腰部から上方を直線的に窪ませる。買入の入る透明釉を施す。内面と高台内から高台縁無釉。	
23-94		製作地不詳陶器	鉢	胎土はやや緻密で、質感は信楽陶器に近い。胎土の色調は青灰色。高台端部を除き灰釉を施す。	

第3章 遺構と遺物

押戻番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
23-95	15-95	瀬戸・美濃陶器	香炉	輪高台の大振りな香炉である。高台は三方所覆ませる。高台内に墨書がある。口縁部内面から体部外面に灰釉を施す。灰釉には粗い質入が入る。欠損部の体部外面に墨線磨りと思われる文様の一部が認められる。96と同一個体の可能性が高い。	18C中から後
23-96		瀬戸・美濃陶器	香炉	大振りな香炉の口縁部片。外面に不鮮明であるが、墨線磨りと思われる文様が認められる。胎土・器形・轆轤目の特徴から、96と同一個体の可能性が高い。	
23-97		瀬入系土器	焼塩蓋	天井部内面には布圧痕が残る。	
23-98		在地系土器	焙烙	型作り、轆轤調整。体部外部中に接合痕が残る。耳は三方所。平底。	江戸時代
23-99		瀬戸・美濃陶器	すり鉢	磨釉を施し、口縁部は外方に肥庄する。口縁部内面の段差は低い。	18C後
23-100		瓦	丸瓦	内面には粗い布痕が残る。僅しは外表面の一部のみにかかる。	
23-101	15-101	鉄製品	弁		

池

押戻番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
24-102	15-102	瀬戸・美濃？磁器	染付小瓶	外面に簡略化した蘭竹文と花卉文を描く。	19C中から後
24-103	15-103	瀬戸・美濃磁器	染付小瓶	外面に蘭竹文と簡略化した花卉文を描く。	19C中から後
24-104	15-104	瀬入系？土器	土瓶	玩具土瓶。上平と下平を型で作り、中央で貼り付ける。簡略化した花卉文を白土で描き、その中央に黄色？と緑？を施す。	
24-105		瀬戸・美濃磁器	染付小杯	高台外面に不明文様。呉須が流れ、線状となる。	近代
24-106	15-106	肥前磁器	染付小杯	口縁部外面と高台外面に墨線を描く。他に文様はない。	近代
24-107	15-107	瀬戸・美濃磁器	染付小杯	外面磨釉物。口縁部内面染付墨線。	近代
24-108	15-108	瀬戸・美濃磁器	染付	外面簡略化した海浜風景を描く。底部内面不明文様。低い蛇の目形高台。	19C前から中
24-109	15-109	肥前磁器	染付小杯	外面花卉文。	19C前から中
24-110	15-110	染付小杯	染付小杯	外面手書きによる花卉文。	近代
24-111	15-111	肥前？磁器	染付小杯	外面手書きによる染め付け。	18C？
24-112	15-112	瀬戸・美濃磁器	染付小杯	手書きによる外面松竹梅文。	近代
24-113	15-113	瀬戸・美濃磁器	染付小杯	外面に花卉文を描く。高台内は墨線と不明跡。口縁部にも墨線を入れる。	近代
24-114	15-114	瀬戸・美濃？磁器	染付小杯	外面手書きにより、樹木と山岳風景を描く。	近代
24-115	15-115	製作地不詳陶器	小杯	底部脇から内面に黄褐色(2.5YR5/4)の鉄釉を施す。底部外面右回転糸切り無調整。	19C？
24-116	15-116	肥前磁器	染付酒壺	外面は濃み地白抜き文。口縁部内面雷文、内面中央隅の松竹梅文。	19C前から中
24-117		瀬戸・美濃磁器	染付酒壺	内外面共に型紙刷り。	19C中以降
24-118	15-118	瀬戸・美濃磁器	染付壇反碗	外面飛雲に鶴文。口縁部内面雷文帯、底部内面は墨線内に「富貴長寿」を書く。	19C中から後
24-119	15-119	肥前磁器	染付壇反碗	口縁部内面から外面は濃み地白抜き文。器壁は薄い。	19C前から中
24-120	15-120	肥前磁器	染付碗	外面植物文、口縁部内面雷文帯、底部内面三友？を施す。	19C前から中
24-121	15-121	製作地不詳磁器	染付碗	焼成不良により釉は白濁し、素地は灰白色を呈する。	19C後
25-122	15-122	製作地不詳磁器	染付碗	磨板による染め付け。透明釉はやや白濁する。	近現代
25-123	16-123	肥前磁器	染付蓋物	外面濃の子文。口縁部軸刺ぎ。焼き跡があり。底部外面焼き跡が時の記号あり。	江戸
25-124	16-124	瀬戸・美濃磁器	蓋物	外面植物文と山？を描く。文様は少なく、無文部分が多い。口縁部軸刺ぎ。高台脇から底部無軸。焼き跡あり。底部外面焼き跡が時の記号あり。	19C中から後
25-125		瀬戸・美濃磁器	白磁皿	型押し成形で文様も施す。	19C中から後
25-126		製作地不詳	陶器皿	焼き跡まりのない陶器。内面から体部外面に透明釉を薄く施す。轆轤成形の後、口縁部を直ませる。	？
25-127		肥前磁器	染付皿	内面に梅蘭山水文を描く。口縁。底部外面に「用」の釘書き。志田清室。	19C前から中
25-128		瀬戸・美濃磁器	染付皿	底部内面花卉文。体部外面不明文様。	19C前から中
25-129		肥前磁器	染付皿	底部内面風凰文。体部外面唐草文。口縁。	18C前から中
25-130		肥前磁器	染付皿	底部内面コンニャク版による五弁花。底部外面「大明年製」刷れ跡か。波佐見。	
25-131		前橋藩高沢窯？	皿	内面丁寧な轆轤調整。外面口縁部下から底部外面丁寧な回転磨り。胎土は緻密で夾雑物は見えない。焼成は酸化焼で焼き跡まりは少ない。陶器か磁器の実焼きと考えられ、調査地点に近い高沢窯の製品と推定される。	19C前から中

標記番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
25-132	16-132	肥前磁器	染付段重	高台外側と口縁部から内面無軸。外面に簡略化した文様をコバルトで施す。	19C中から後
25-133		瀬戸・美濃磁器	水筒	上面に龍の染付文。筋子を形どった脚が1つ残る。	19C?
25-134	16-134	瀬戸・美濃磁器	染付壺	いわゆる油壺。外面を押しして文様を施し、窪みに溝みを入れる。呉須の色調は濃い。	19C前から中
25-135	16-135	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	錆軸を施した後、口縁部外面以下の軸を拭い取る。	18C後
25-136		瀬戸・美濃陶器	銅鉢	糸切り無調整の底部から、低く斜めに延びた後、体部が直立する。底部を除き灰軸を施す。体部外面上方の取っ手は欠損。	19C中から後
25-137	16-137	製作地不詳磁器	花瓶	外面から口縁部内面黒色の鉄軸を施す。坯器質に焼き締まる。	近現代
25-138	16-138	磁子陶器	徳利	外面に灰軸を施し、口縁部に胎軸を掛ける。体部に鉄給具で「十一」「十一屋」と景号を入れる。	近現代
26-139		製作地不詳陶器	湯冷まし	手捻りにより作る。表面には指頭による凹凸多い。内面から体部外面下位に胎軸。一箇所貼付文あり。	近現代
26-140		製作地不詳磁器	急須	いわゆる萬古焼。つまみは擬宝珠形で運動式。	
26-141		瀬戸・美濃陶器	蓋	天井部外面に灰軸を施す。貫入あり。汁注ぎの蓋であろう。	19C中から後
26-142	16-142	磁子陶器	染付土瓶蓋	天井部外面は、白化粧の後に呉須で写のある山岳風景を描く。天井部外面透明釉。つまみは獅子。	近現代
26-143		磁子陶器	染付土瓶蓋	天井部外面は、白化粧の後に呉須で文様を描く。	近現代
26-144	16-144	製作地不詳陶器	急須	いわゆる萬古焼。取っ手下に「萬古」の押印。注ぎ口と取っ手端部金彩。外面には若・波・亀を金で輪郭を施し、一部黒色で塗る。	近現代
26-145		製作地不詳陶器	急須	やや器高の高い焼き締め。色調灰黄褐色(10YP6/2)	近現代
26-146		瀬入系土器	焼塩壺	小型で罐體成形。口縁上面部は平肌。	
26-147	16-147	瀬戸・美濃陶器	灰落とし	底部と口縁部内面以下を除き透明釉(薄い長石釉)を施す。外面に鉄給具による一対の笹文を三箇所配す。口縁部上面敲打により軸が剥離する。外面の軸や文様は貫入からの風化により剥落する。	
26-148	16-148	在地系土器	釜	表面黒色仕上げ。内面に磨たような使用痕は認められない。	
26-149	16-149	瀬戸・美濃陶器	捏鉢	高台座以下無軸。高台座の灰軸下に鉄給具による圓線。灰軸上に髹白を流し、更に部分的に青軸を流す。内面に目皿二箇所残る。	19C中から後
26-150			石版		
26-151	16-151		下駄	小型の割下駄。右側が多少欠けている。踵部分もすり減る。	時期不詳
26-152			膠	セルロイド?製。	近現代
27-153		在地系土器	植木鉢	小型の植木鉢。内外面黒色に仕上げられる。	近現代か
27-154		在地系土器	植木鉢	小型の植木鉢。内外面黒色に仕上げられる。壺形であろう。	近現代か
27-155	16-155	磁子?陶器	植木鉢	外面から口縁部内面に黒色の鉄軸を厚く施す。	近現代
27-156		磁子?陶器	植木鉢	外面から口縁部内面に黒色の鉄軸を厚く施す。155と胎土は同じであるが、還元焼成で焼き締まる。	近現代

表土

標記番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
27-157		在地系土器	小皿	底部外面左回転糸切り無調整。体部はやや円く。	
27-158		在地系土器	皿	底部外面左回転糸切り無調整。体部は開く。器表が摩滅しているうえ、口縁部が一部しか残っていないため、端部が残っているか否かは不明瞭。	
27-159		肥前磁器?	碗	口縁部片。筒形碗状みを呈するか?外面はやや太い素焼。呉須の色調は酸化コバルトに近い発色。	19C中から後
27-160	17-160	肥前磁器?	小杯	外面には山水文を描く。高台内不明瞭。呉須は酸化コバルトに近い発色。	19C中から後
27-161		肥前?磁器	染付小杯	外面に素焼で文様を描く。	19C前から中
27-162	17-162	肥前磁器	小杯	外面に電と花、蝶を描く。高台は外方に開く。	19C前から中
27-163		製作地不詳磁器	ミニチュア急須	内面と高部外面を除き、透明釉を施す。体部外面に上絵で梅花を描く。枝は細く、黒色の上絵。おしべは青で書く。取っ手は後部に貼り付ける。	近現代
27-164	17-164	瀬戸・美濃陶器	碗	高台端部を除き、高台内まで灰軸を施す。軸には非常に粗い貫入が入る。体部中位外面に鉄給具による2本の團縁を引く。	18C中から後
27-165	17-165	瀬戸・美濃磁器	碗蓋	内外面酸化コバルトに近い発色の呉須を用い、簡略化した文様を描く。天井部内面には簡略化した「寿」字跡。	19C中から後
27-166	17-166	肥前磁器	碗	底部内面には五弁花文、外面には割と松葉文を描く。高台内「大〇年製」刷れ跡。	18C中から後

第3章 遺構と遺物

採得番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
27-167	17-167	肥前磁器?	碗	口縁部と体部内面各2条の圈線を施す。高台内は無軸部分がある。高台端部は無軸で、周囲には砂が沉着している。口縁端部は無軸で、薄く藍色に発色している。	17C
27-168	17-168	肥前磁器	碗	内面無文。呉須の発色は良い。高台を器高は低い。	18C前から中
27-169		肥前磁器	鉢	口縁部内面四方華文、外面匳の子文を描く。	18C末から19C中
27-170		製作地不詳磁器	色絵鉢	口縁端部無軸で、その部分に金彩を施す。口縁部内面は、黒7色の二重圈線間に二重行文を並べる。二重行文が蛇の目状になるように上絵具で充填する。上絵の色調は不明。外面には金色で扇輪の輪郭を描き、中を緑7で充塞する。緑7の上絵下には黒色の上絵具による線も認められる。内面にも僅かに上絵が認められる。金色の輪郭と黒色の線。その上に施した緑色の上絵具などが、外面と共通することから、文様は外面と同様な可能性がある。清明磁器か	
27-171		肥前磁器	碗	外面無軸、内面透明釉の掛け分け碗。高台外面から高台内無軸。底面内面蛇の目状刺ぎ。波夜見台。	19C中から後
27-172	17-172	肥前磁器	白磁皿	口縁部には小さく波状を呈し、鉄彩を施す。底面内面は原押により菊花文を浮き出させる。径のやや小さい蛇の目凹部高台。	19C前から中
28-173		肥前磁器	色絵小皿	内面は中央の文様と口縁部の圈線のみ呉須で描く。他は金、赤、ピンクを使用。	
28-174	17-174	肥前磁器	皿	底面内面コンニャク版による五弁花。体部内面草文。外面は簡略化した草文。高台内は1条の圈線と不閉鉢。波夜見系。	18C前から中
28-175		製作地不詳磁器	鉢	内面は、鉄絵具で化粧した後、白土を部分的に打ち研毛し、更に白土上に染め付けを施す。高台端部を除いて全面に灰釉を施す。	時期不詳
28-176		瀬戸・美濃磁器	青磁皿	型押し成形で文様も施す。平面形は菱形を呈する。	近現代
28-177		肥前磁器	染付皿	中皿の底部小片。	18C前から中
28-178		益子陶器	おろし皿	内面と口縁部外面に鉄彩を施す。外面には細かい赤色が残る。	近現代
28-179		瀬戸・美濃磁器	蓋	口縁端部から内面は無軸で、朱肉が付着している。朱肉内れとして使用していたと考えられる。天井部外面は草花を描く。	近現代
28-180		製作地不詳磁器	蓋	小型で、天井部に小孔があることから、急須の蓋と考えられる。天井部外面中央には、よくら蓋と書われる文様を描く。	
28-181		製作地不詳磁器	青磁蓋	口縁部形状は合子の身と同様である。受け部は無軸で、外面を青磁釉、内面を透明釉で掛け分ける。天井部外面は片取りにより文様を施す。	時期不詳
28-182		瀬戸・美濃磁器	蓋	方形の蓋で、天井部外面は銅板転写で文様を施す。口縁端部は無軸。	近現代
28-183		肥前磁器	染付鉢蓋	つまみ周辺と口縁部周縁に各二条の圈線を描く。一箇所に若松文が認められる。	17C末から18C後
28-184	17-184	製作地不詳磁器	段重	底部外面と口縁端部無軸。体部外面には酸化コバルトで文様を描く。	近現代
28-185		製作地不詳磁器	土瓶	底部周縁以下と受け部周辺は無軸。外面には灰釉を施す。内面は薄く施す。胴部外面には白磁で菊花文を描く。胎土はやや緻密で焼き締まる。	近代
28-186		相馬陶器	鉢	体部に深い線があり、角形の鉢と考えられる。高台端部を除き厚く施す。焼成不良により軸は白濁するが、部分的に粗い貫入に墨が入られていることが観察できる。高台端部は藍色を呈する。	近現代
28-187		益子?	陶器行平	体部外面下位以下と受け部を除き透明釉を施す。取っ手は、平たく平たく置いたものを貼り付ける。	近現代
28-188	17-188	益子?	陶器行平	体部外面下位以下と受け部を除き鉄彩を施す。取っ手と内面の鉄彩はやや厚く、他は薄く施す。体部外面には、施釉以前に飛び粉を施す。底部外面は使用により黒化する。取っ手の断面形は丸い。	近現代
28-189	17-189	瀬入系土器	焼塩壺	底部外面左回転糸切り無調整。左回転輪軸成形の小型焼き壺壺。	18C末から19C
28-190		瀬入系土器	焼塩壺	左回転輪軸成形の小型焼き壺壺口縁部片。	18C末から19C
28-191		瀬入系土器	焼塩壺	左回転輪軸成形の小型焼き壺壺口縁部片。	18C末から19C
28-192		瀬入系土器	焼塩壺	左回転輪軸成形の小型焼き壺壺口縁部片。	18C末から19C
28-193		瀬入系土器	焼塩壺	左回転輪軸成形の小型焼き壺壺口縁部片。	18C末から19C
28-194		瀬入系土器	焼塩壺	底部外面左回転糸切り無調整。左回転輪軸成形の小型焼き壺壺底部片。	18C末から19C

第2節 遺構と遺物

標記番号	図版番号	種別	器種	特徴	備考
28-195		搬入系土器	焼塩釜	底部外面左回転糸切り無調整。左回転軸構成形の小型焼き塩釜底面片。	18C末から19C
28-196		搬入系土器	焼塩釜	底部外面左回転糸切り無調整。左回転軸構成形の小型焼き塩釜底面片。	18C末から19C
29-197		製作地不詳磁器	行平か	体部外面以下と受け部は無軸。内面は全面白土掛け後、染め付け、透明釉を施す。外面は部分的に白土の刷毛目を入れ、灰釉を施す。底部は小さく高台を削り出す。	近現代
29-198		益子?陶器	鍋	体部外面下位以下と口縁部を除き鉄泥を施す。取っ手部と内面の鉄泥はやや厚く、他は薄く施す。体部外面には、施釉以前に飛びぬを施す。底部外面は使用により黒変する。	
29-199		瀬戸・美濃陶器	水壺	体部は外反し、口縁部内面下位に突帯を巡らす。外面には型状工具で文様を彫り込む。高台縁以下を除き灰釉を施し、部分的に銅緑釉を外面に施す。	19C中から後
29-200		益子陶器	すり鉢	小型のすり鉢で、口縁部から高台縁まで光沢のある釉を施し、内面口縁部以下と高台縁以下は無軸。	近代
29-201		堺・明石陶器	すり鉢	片口縁部を含む口縁部。外面口縁部以下黒削り。口縁部内面の段差は非常に低い。	19C
29-202		益子陶器	すり鉢	口縁部から体部外面まで光沢のある釉を施す。内面口縁部以下は無軸。	近代
29-203	17-203	在地系土器?	器種不詳	円筒形を呈し、底部外面付近に各1条の沈線が巡らす。外面には光沢が薄い青い青釉を施し、内面と径の大きい側の端部は無軸である。径の小さい側の端部から大きい側の内面にかけての表面は、層されたように黒色に着色する。また、径の小さい側には、焼成以前の穿孔が一方所残る。欠損のため不明であるが、穿孔は一对であった可能性がある。土質塩礫突の一部であろうか。	近現代
29-204		搬入系土器	釜	口縁部小片のため径は正確ではないと思われる。軸構成形で、体部外面黒削り。内面から筒端部まで薄い褐色を帯びた透明釉を施す。胎土中に金雲母を含む。胎土の特徴から三河土器の可能性が高い。	近現代
29-205	17-205	在地系土器	火消煮蓋	器表黒色。天井部外面型作り時の砂付着。天井部中央につまみを貼り付ける。天井部内面黒線は使用により磨滅する。	江戸時代か
29-206		瀬戸・美濃?陶器	植木鉢	口縁部から体部外面に灰釉を施す。釉には貫入が入る。底部外面は無軸で、水抜き孔を開ける。底部には型作りの脚を三カ所貼り付ける。	19C
29-207	17-207	製作地不詳磁器	植木鉢	六角形を呈する植木鉢。内面口縁部以下と底部は無軸。低い脚を三カ所に貼り付け、底部には水抜き孔を一カ所設ける。体部外面には鳳凰と花卉文を染め付ける。割れ口に焼き痕が認められ、底部外面には記号の一部が残る。	19C前から中
29-208		石製品	石版	側面には、彫形字の彫痕が残る。一面には22から24の方眼を切り込み、他面には1条の切り込み線が施される。周縁の調整は難で、痕跡が明瞭に残る。	近現代
30-209	17-209	瓦	棟先瓦	棟の先端に葺く瓦の左右に施される褐色文の一部である。表面は丁寧に仕上げられ、「キヤラ」と呼ばれる粉が認められる。僅しは認められない。	江戸時代
30-210		石製品	砥石	3面を使用。小型である。	
30-211		石製品	砥石?	形状は砥石であるが、磨理が多く良質なものでない。	
30-212		石製品	砥石	小片で、全体形状は不明。1面を使用。	
30-213		石製品	砥石?	側面が磨理で割れている。2面に種かな使用痕が認められる。	
30-214		搬入系土器	焼塩釜蓋?	軸構成形焼き塩釜の口縁部径と低い受け部径の径がほぼ一致する。焼き塩釜と色調が若干異なるが、この種の蓋の可能性が高い。	18C末から19C?
30-215		搬入系土器	泥印	泥印体部片。外面に「三河〇〇瓦〇同業組合〇田奥作」の押印がある。この押印と胎土の特徴から三河土器と判断される。	近現代

第4章 小考 一まやばし城と前橋城北曲輪遺跡—

1 はじめに

以上のように前橋城北曲輪遺跡からは溝、掘立柱建物、井戸、池など古墳時代及び近世から近代にかけての遺構が調査されたのであるが、以下、中世以降の本遺跡の性格について若干の考察を試みたいと思う。

2 前橋城

(1) 厩橋城・前橋城の城主の変遷

本遺跡はその遺跡名が示すように前橋城北郭に位置している。前橋城は中世の厩橋（まやばし）城から発展したもので、伝説によれば惣社長尾氏が築城した石倉城が川欠けで崩れ落ち、これを造り直したものが厩橋城であると言う。その築城は長野氏という見方が一般的だが、少なくとも長尾方業が箕輪の長野信業と総社長尾氏を挟撃した太永7年（1527）までには整備されていたようである。

関東管領上杉憲政の平井退去後、厩橋城は小田原の北条（後北条氏）氏康の手に落ちて福島氏、朝倉政成が入るが、永禄3年（1560）に長尾景虎が越山して一旦は長尾賢忠を据え、永禄5年には北条（きたじょう）高広を城主としている。北条高広は時の情勢をよく見極め、永禄10年後北条氏に従うが同12年には上杉（越後長尾）氏に帰参、天正6年（1578）の上杉謙信没後の御館の乱で敗れて翌年進出してきた武田方、武田氏滅亡後の天正10年には織田信長配下の滝川一益に従い、本能寺の変で一益が西上すると御館の乱で敵対した越後の上杉景勝に付いた。しかし天正12年北条氏政に攻められて開城。城は北条氏邦の属城となった。

天正18年（1590）小田原の役後に徳川家康が関東に封ぜられると、厩橋城には平岩親吉が入ったが、慶長6年（1601）には酒井重忠が封ぜられた。17世紀後半頃から「前橋」表記が一般化するが、まだ「まやばし」と呼んでいたようである。酒井氏は9代に亘り厩橋（前橋）城主であったが、寛延2年（1749）（結城）松平直矩が城主となるものの、川欠けに耐えかねて明和5年（1768）川越に移城。前橋城は破却されて城内東寄りに陣屋が建てられた。下って慶応3年（1863）、前橋城は再築され、松平直克が入城。明治4年（1871）鹿沼置県。明治9年の第2次群馬県の発足により縣庁となっている。

(2) 中世の厩橋城

戦国期の厩橋城は故山崎一先生が予測されていたように少なく現在の県庁周辺以西に在ったことは間違いないようであるが、近年の発掘調査で少しづつ明らかになりつつあるものの未だ明瞭ではない。ただ「石川忠房留書」には一の曲輪には一段高い所があって、これを中心に川に沿って曲輪が並んでいたという記述があり、武田信玄が竹梯子を使って責めさせていることから利根川沿いは崖になっていたことが分る。

後北条氏には総郭という概念があり、本拠の小田原城、或いは本拠の館林城でも城下全体を大きく堀や土塁で囲っている。中毛地域の拠点の城であった後北条氏時代の厩橋城でもそうした総郭を設けた可能性が考えられる。酒井氏時代の『直泰夜話』に「一、前橋の広小路は、平岩主計（頭）殿在城の節、出来候郭なり」という一文があるが、広小路は平岩時代に追加された箇所ということになる。文中の広小路は第1回右寄りの島田郭と大手門の間と想定されるが、島田郭の他、その内郭側の加内曲輪（水曲輪）も形態的に島田曲輪と合わせなければ完結せず、三の丸下のネズミ門前、石川門付近までが本来は大きな馬出になっていたと考えられているので、ここも近世に入ってから追加された郭と判断される。従って後北条時代の厩橋城は第1回の本丸、二の丸、三の丸、高浜曲輪、厩曲輪等の主要部分と、酒井氏時代の外曲輪の範囲と想定される。

(3) 近世前橋城

平岩時代に広小路城が造られたことは既に述べたが、当時の様子はつまびらかでない。しかし「直奉夜話」は「柏木門（中略）大昌院様（忠清）御代、慶安中に来候由」など、酒井氏2代藩主忠世から4代忠清時代に整備を行い、一応の完成を見たことを伝えている。

酒井氏時代の前橋城（第31図）は折れ等が多い。利根川岸に高浜曲輪、本丸、二の丸、厩曲輪、その東に三の丸、鼠曲輪等が並ぶ主郭部があり、本丸南には三層の天守閣があった。本丸と二の丸は南北は堀で隔て

られるが、東西は堀で仕切られるだけである。三の丸の東から北にかけては外曲輪があり、その北東部に柳原門があって城外に通じ、風呂川と呼ぶ用水堀を引き込んでいた。主郭部の南には（仮称）



第31図 酒井氏時代末期の前橋城縄張り図（山崎一先生作図）

柳宮郭があり、外郭の南から東にかけては加内曲輪（水曲輪）、その東には島田曲輪がある。島田曲輪の南側中程には郭馬出しが付く大手冠木門があった。

やがて前橋城主郭部は利根川の被害を受けるようになり、宝永3年(1706)年、忠挙の時、ついに本丸西方櫓、高浜曲輪角櫓が崩れ落ちた。再三の利根川改修も実らず本丸そのものが危険となったため、寛延元年(1748)、三の丸への移転の許可されている。しかし、工事そのものは松平氏に引き継がれたことになるが、寛延4年へ宝暦元年(1751)実施のこの工事は三の丸に御殿を新築しただけのものであった。

松平氏が入ってからも川欠けは進み、三の丸さえ危険となった。前橋藩は川越移城を願い出て許可され、明和5年(1770)移城した。前橋城は天守閣等破却され、更地となった。酒井家の「六臣譯筆」にはこの時の破却を伝え「石垣ハ悉ク鉛にて繋、材木類漆二て羅目>>を手厚く附ケ有之」と記している。



(4) 前橋陣屋

松平氏の川越移城に伴って、分領となった前橋には旧島田曲輪に陣屋が建てられている。陣屋の周囲には屋敷も建てられているが、主郭部周辺に建物は無く、畑には水田も作られていた。

第32図 再築前橋城縄張り図 (山崎一先生作図)

(5) 再築前橋城

城を破却に迫りやった利根川の洪水は天保年間の郡奉行安井与左衛門の努力で押えられ、文久3年(1863)、前橋城再築が幕府より許可される。築城資金は町の衰退を歎く前橋の米・生糸商人を始めとする前橋町有志が1万両の築城資金を提供した。しかしその普請は発掘調査によって本丸堀の石垣ですら裏込め石が用いられていないなど、見た目の整備に留まっている感もある。

再築前橋城は旧三の丸を拡張して本丸とし、その南西から南に二の丸、北東に三の丸を配置している。基本的縄張りは酒井氏時代のそれを踏襲しつつも、旧島田曲輪、加内曲輪をまとめて外曲輪とし、仮称神宮曲輪もまとめて南曲輪に一括し、外縁ラインは直線、或いは大きな曲線で単純化している。天守閣は無く、櫓台には櫓に代って砲門が設置されるという幕末期の新戦法に対応した和洋折衷の実験的な構造の城であった。

3 調査区に於ける変遷**(1) 中世段階での本遺跡の調査区**

こうした変遷を経た前橋城であるが、本遺跡調査区の変遷はどうだったのであろうか。先に述べたように中世の状態はつまびらかでなく、北条(きたじょう)氏時代の本遺跡周辺は既に城下町となっていた可能性が考えられる。しかしそれが侍屋敷なのか、町屋或いは畑地であったのかは不明である。

また後北条時代には総郭を造っていた可能性が考えられるので本遺跡は城下の一角に含まれると考えられるが、やはり本遺跡付近がどのような状態であったかを確認することはできなかったのである。

(2) 酒井氏時代の本遺跡の調査区

本遺跡出土遺構のうち1・3号溝、及び1～3号建物平岩氏～松平氏前期の時代の遺構として把握しているが、次に酒井氏時代、正保元年(1644)の城絵図を使って近世前期の本遺跡付近の状況を探ってみたいと思う。第33図上の図は正保城絵図を現代の前橋市都市計画図に重ねたものである。多少のズレはあるが、下馬將軍と呼ばれた藩主酒井忠清が若かった頃、本遺跡付近が侍屋敷となっていたことが分かる。

小規模な堀である1・2号溝は飯島伝七と柴源太夫の屋敷界と想定されるが、或いは柴源太夫と神原九右衛門の屋敷界の道路東側側溝であった可能性もある。中世的な掘立柱建物で想定される柱列は飯島伝七屋敷に伴うものと判断される。

居住者である飯島伝七、柴源太夫、或いは神原九右衛門がどのようなクラスの人物であるのか現時点で確認できなかったが、少し遡る寛永初頭の同姓の神原五郎左衛門、飯島弥兵衛が共に60石(石高は寛永13年(1636)に急増する)を給しているので、中級武士ではなかったかと思われる。

(3) 陣屋時代の本遺跡調査区

次に陣屋時代であるが、陣屋時代の状況は田代よし子氏所蔵の図によって窺うことができる。

同図によると柳原門から南に続く通路沿いに屋敷が並んでいる。本遺跡付近は空き地か、或いは土地の管理を考えれば畑地となっていた可能性があるが、残念ながら遺構としては確認できなかった。

(4) 松平氏時代の本遺跡調査区

最後に再築前橋城時代の状況を見てみたい。第33図下の図は再築前橋城図を現在の前橋市都市計画図に当て嵌めた前橋市教育委員会作成図に、明治3年の屋敷の居住者を書き込んだものである。再築前橋城の時代、

本道跡付近は侍屋敷で、調査区は豊田作兵衛の屋敷地であった。豊田氏は100石取（或いは150石取）の平土の家柄で、360坪が屋敷地として宛てがわれていた。

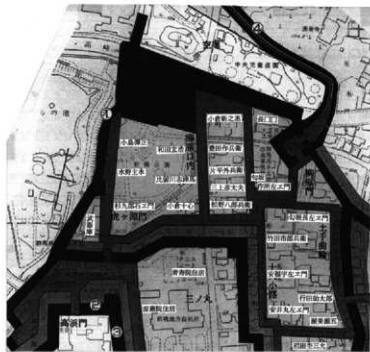
この時期の遺構には井戸や池、溝がある。明治期までの2時期が確認された池は橋で渡る中島を伴い、2号溝は屋敷東側を画する溝であった。

4 おわりに

今回は整理期間も短く、筆者の能力不足もあって十分な考察を行うことができなかったのであるが、以上のように本道跡は戦国期に城下町となった可能性が考えられ、近世からは陣屋時代の一時期を除いて武家屋敷であったことが確認にされた。

またその変遷を見る中で、上述のように本道蹟に於ける江戸期の居住者を特定することもできた。よって本書の調査成果は前橋城内の屋敷遺構を検討する上で有用なデータとして提示できることとなったのである。

このような成果を報告し、本報告書が今後、前橋城の研究に資することを期待して稿を閉じたいと思う。



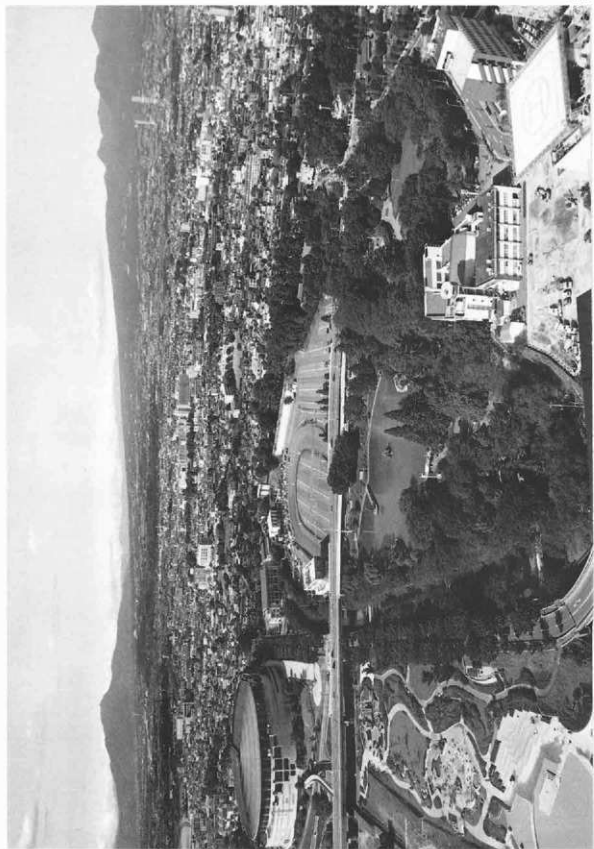
第33図 上：正保元年の北郭武家屋敷の配置

下：明治3年の柳原御門内武家屋敷の配置

【主要参考文献】

- 前橋市史編さん委員会『前橋市史 第2巻』1973
- 前橋市史編さん委員会『前橋市史 第3巻』1975
- 群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1989
- 前橋市教育委員会『開國の華・前橋城』1990
- 群馬県教育委員会『前橋城道跡！』1997

写 真 图 版



調査区周辺遠景



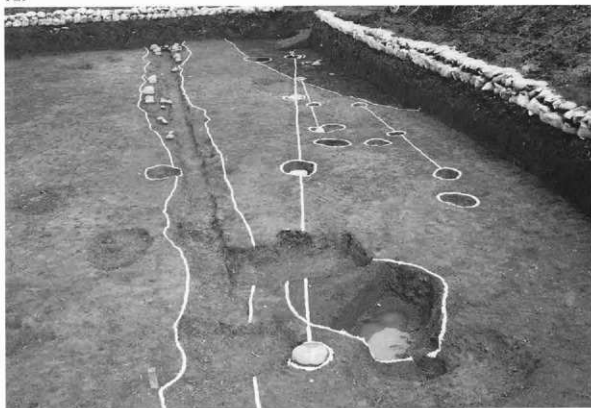
調査区全景（西から）



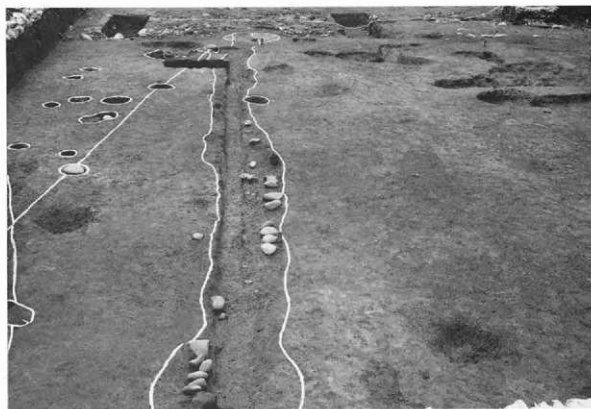
調査区全景（北から）



1号墳北縁周堀（東から）



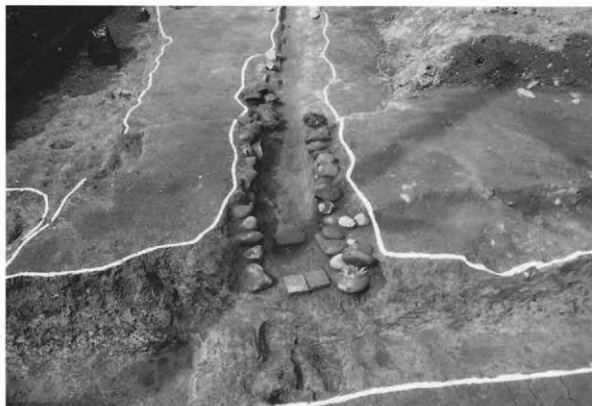
1・2・3号堀立柱建物（西から）



1号溝（東から）



2号溝 (北から)



1・2号溝合流部石組 (東から)



3A・3B号溝（南から）



3A・3B号溝土層堆積状況（北から）



1号墳埴輪出土状況



池護岸石組



1号掘立柱建物礎石



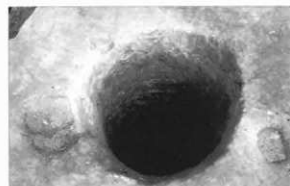
1号掘立柱建物礎石



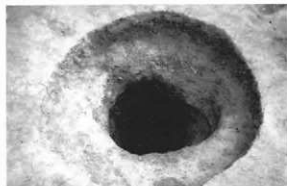
1号井戸



2号井戸



3号井戸



4号井戸



池全景（北から）



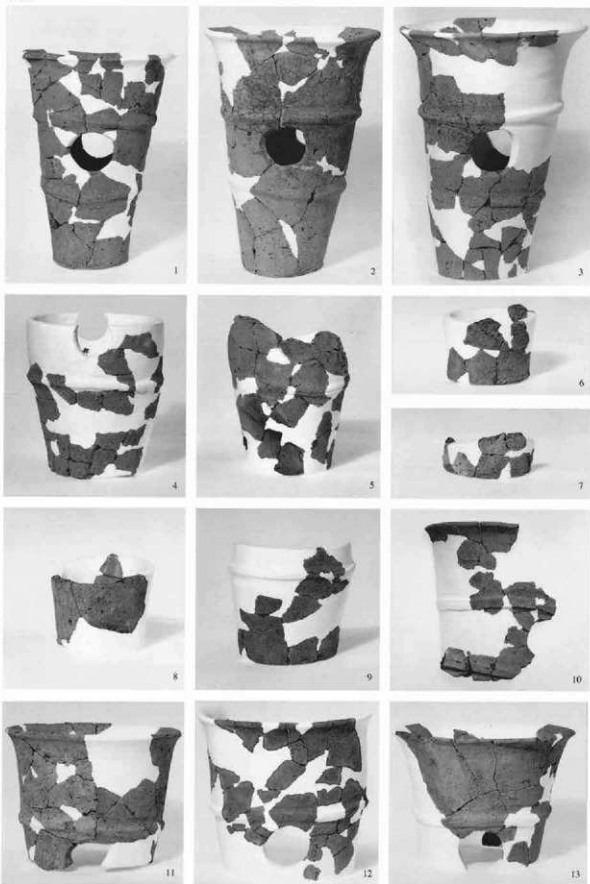
池護岸部（南から）



池邊岸部 (南から)



池邊岸部 (北から)



I号墳出土遺物 埴輪 (1)



14



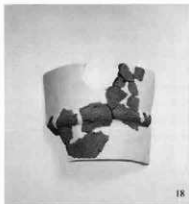
15



16



17



18



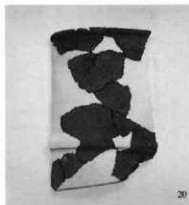
19



21



22



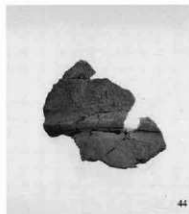
20



24

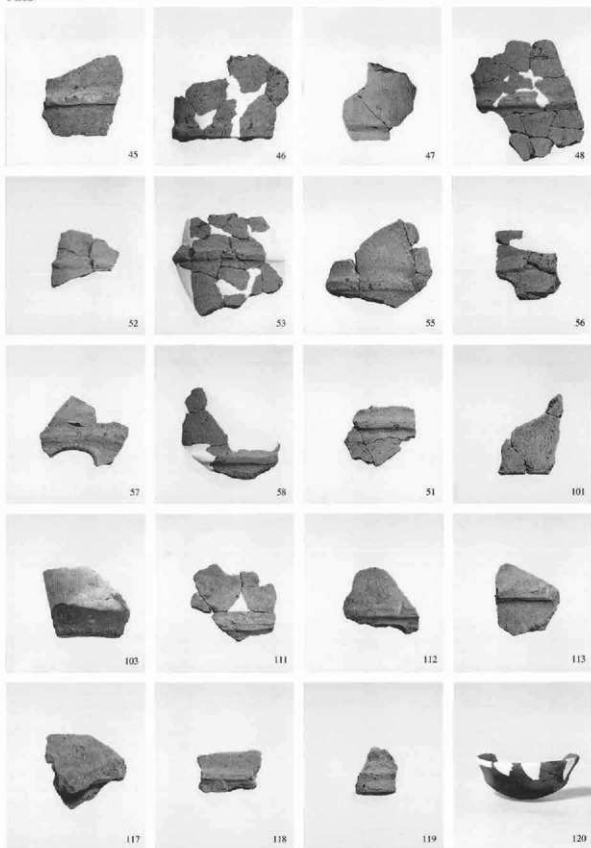


25

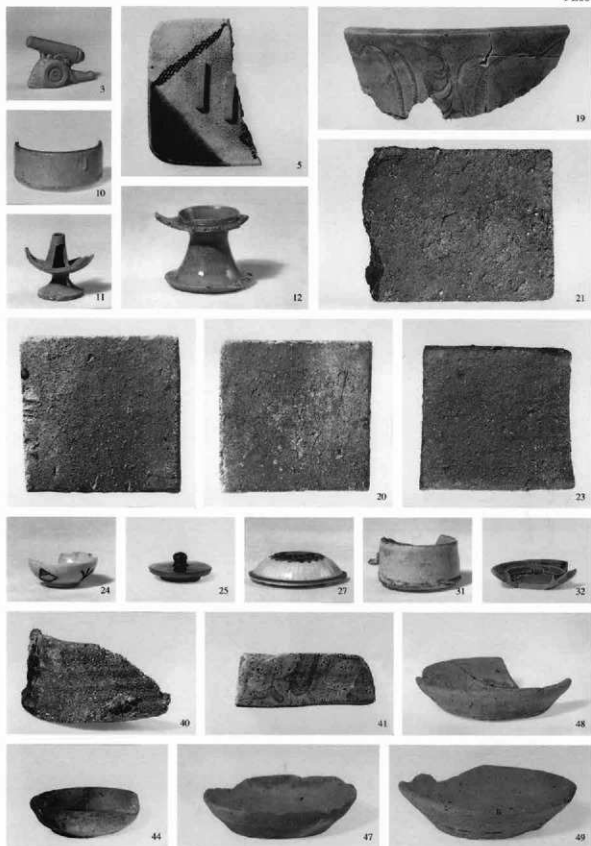


44

1号墳出土遺物 埴輪(2)



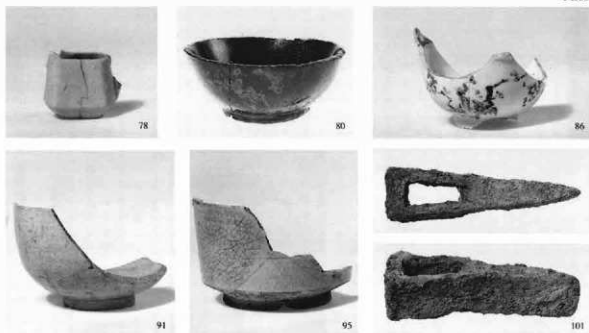
1号墳出土遺物 埴輪 (3)・古墳時代土器



1号墳周堀内出土遺物



1、2、3号溝出土遺物



2・3・4号井戸出土遺物



池出土遺物



池出土遺物



遺構外出土遺物

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第299集

前橋城北曲輪遺跡

前橋地家蔵所長宿舍敷地
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年3月20日印刷

平成14年3月26日発行

編集・発行 / 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

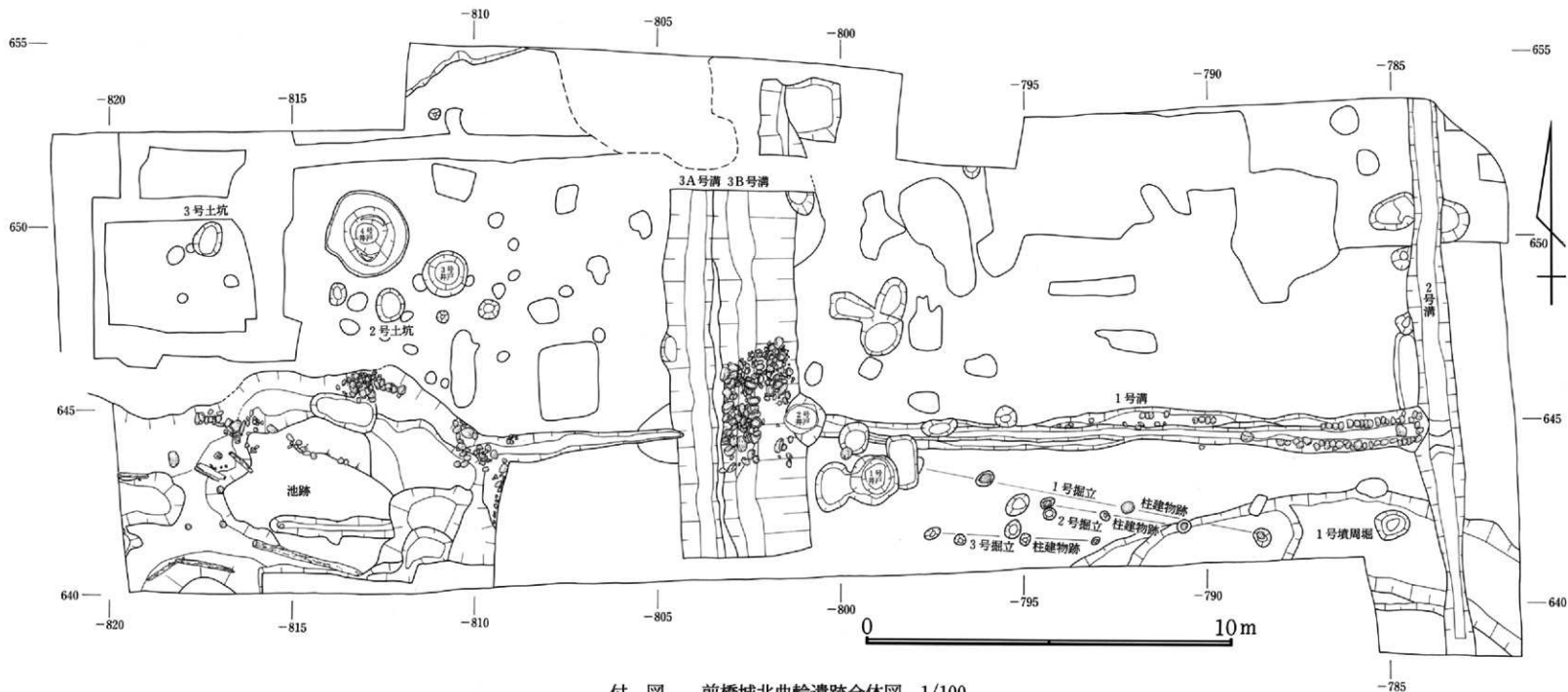
〒377-8555

群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 0279(52)2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷 / 株式会社 開文社印刷所



付図 前橋城北曲輪遺跡全体図 1/100